

市内遺跡発掘調査

—平成25年度—

- 吉田城址第43次発掘調査
よし だ じょう し
- 二連木城址第5・6次発掘調査
に れん 木 じょう し
- 居村遺跡第3次発掘調査
い むら い せき

2016年3月

豊橋市教育委員会

例　言

1. 本書は、平成25年度に国庫・県費補助を受けて行った市内遺跡発掘調査の報告書及び概要報告である。掲載遺跡名、所在地、調査期間・面積及び担当については、各調査報告の冒頭に記した。
2. 発掘調査に際して、土地所有者や地元の方々のご理解・ご協力を頂いた。また、調査及び報告書作成に際して、ご指導・ご教示及びご協力を頂いた。
3. 報告書の執筆及び編集、遺構・遺物の写真撮影は基本的に各調査担当者が行った。
4. 各調査に使用した座標は、国土交通省告示に定められた平面直角座標第VII系に準拠している。本書に使用した方位はこの座標系に沿うが、座標を求めていないものについては磁北である。
5. 遺構・遺物のスケールについてはそれぞれに明示した。写真的縮尺は任意である。
6. 調査にあたって作成した写真・カラースライド・実測図等の記録や出土遺物は、豊橋市教育委員会において保管・管理している。

総　目　次

■吉田城址第43次発掘調査	1
■二連木城址第5・6次発掘調査	25
■居村遺跡第3次発掘調査	67
報告書抄録	91

よし だ じょう し
吉 田 城 址

第43次発掘調査

例 言

1. 「吉田城址第43次発掘調査」は、平成25年度に国庫・県費補助を受けて行った調査の報告書である。所在地、調査期間・面積及び担当は下記のとおりである。なお、報告書作成は小林久彦が行ったが、第1章については「豊橋市埋蔵文化財調査報告書第129集 市内遺跡発掘調査—平成23年度一」(2014)の「吉田城址第39~41次発掘調査」の第1章(村上執筆)を再掲した。

○豊橋市八町通三丁目124・125 ○平成25年9月9日~10月4日

○230m² ○村上 昇(豊橋市教育委員会教育部美術博物館)

目 次

第1章 遺跡の立地と歴史的環境	3
第2章 調査の目的と経過	7
第3章 遺構と遺物	9
第4章 総括	19
写真図版	20

挿図目次

第1図 吉田城址周辺地形図(1/40,000)	3
第2図 周辺遺跡分布図(1/25,000)	5
第3図 調査区位置図(1/2,500)	7
第4図 調査区全体図(1/80)	10
第5図 調査区土層断面図・ sondage実測図(1/80・1/40)	12
第6図 出土遺物実測図-1(1/3・1/4)	15
第7図 出土遺物実測図-2(1/3)	17
第8図 吉田城址外堀・土壙位置図(1/5,000)	19

表 目 次

第1表 遺物観察表	18
-----------	----

写真図版目次

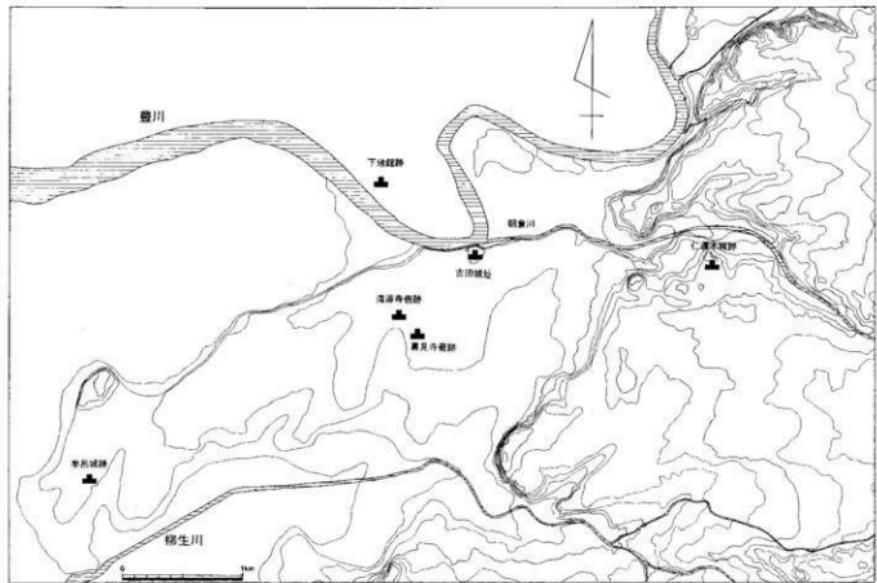
1-1 W-1・2区全景(南から)	21	2 W-2区全景(南から)	21
2-1 E-1・2区全景(南から)	22	2 E-2区全景(西から)	22
3-1 SD-2全景(南から)	23	2 SD-3全景(南から)	23
3 SD-1断面(西から)	23	4 SA-1全景(西から)	23
5 SA-1SK-22(北から)	23	6 SA-1SK-27(北から)	23
4 出土遺物	24		

第1章 遺跡の立地と歴史的環境

1. 遺跡の立地（第1図）

吉田城址は豊橋市の中心部、豊橋市今橋町他に位置する（第1図）。遺跡は、東西約1400m、南北約600mの規模を有する近世城郭址であるが、前身である戦国期の吉田城（今橋城）の遺構・遺物をはじめ、縄文時代から古代・中世、あるいは近代の遺構・遺物が確認される複合遺跡である。

豊橋市の市街地の北では豊川が大きく蛇行し、河口に向けて沖積低地を形成する。豊川が南から北西へ大きく流れを変えるところで、東から流れ込む朝倉川と合流する。吉田城址の本丸は、この合流点の左岸に位置する。豊川の左岸には河岸段丘・豊橋面が発達し、その中でも吉田城址周辺は最も標高が高く、吉田城址の北側は比高8mの段丘崖である。縄文時代以降、この河岸段丘上に集落が形成される。古代～中世には、伊勢神宮の莊園である鮑海神戸・吉田御園があり、その後の吉田の基礎となつた。豊川左岸に築かれた吉田城にとって、豊川は天然の堀であるとともに、重要な水上交通路であった。近世には上流と下流を結ぶ川舟が行き来し、豊川河口の吉田は西国や江戸への海上航路の玄関口でもあった。陸上交通の面では、吉田宿を擁し、江戸と京・大阪を結ぶ東海道、豊川沿いに信州へ通じる別所街道、渥美半島へ延びる田原街道が交わる交通の要所であった。



第1図 吉田城址周辺地形図（1/40,000）

2. 歴史的環境（第2図）

遺跡の来歴

吉田城址は、豊橋市役所や豊橋公園あたりが中心となる。豊川を背にして本丸があり、その東側に金柑丸が連なる。曲輪は、本丸と金柑丸を中心に、半同心円状に二の丸と三の丸が広がる。三の丸の外側は近世の武家屋敷地であり、これを外堀が囲む。外堀の南には東海道吉田宿があった。

吉田城址の歴史は、永正2（1505）年、豊川の一色城主であった牧野古白が、吉田城の前身である今橋城を築いたことに始まる。通説では、駿河の今川氏親の指示により、西三河の松平氏に備えて築城したとされる。吉田城址本丸に隣接する金柑丸が今橋城の主郭と推定され（豊橋市1998）、方形単郭の小規模な城郭とされることが多い。しかし、発掘調査により、近世吉田城の三の丸端まで広がる複郭構造であることが判明している（岩原2006）。また、今橋城築城の際、地割を改変して城下町を造り、吉田宿の再開発が行われている（賛・赤木編1994）。その後、牧野氏と田原の戸田氏との間で今橋城を巡る争奪戦が繰り広げられ、その内で今橋城は吉田城と名称を変えている。やがて永禄7（1564）年、徳川家康によって三河は統一され、酒井忠次が吉田城主となる。酒井氏の在城期間までの地割りは、それまでの地割を基本的に踏襲したものである（賛・赤木編1994、岩原2006）。

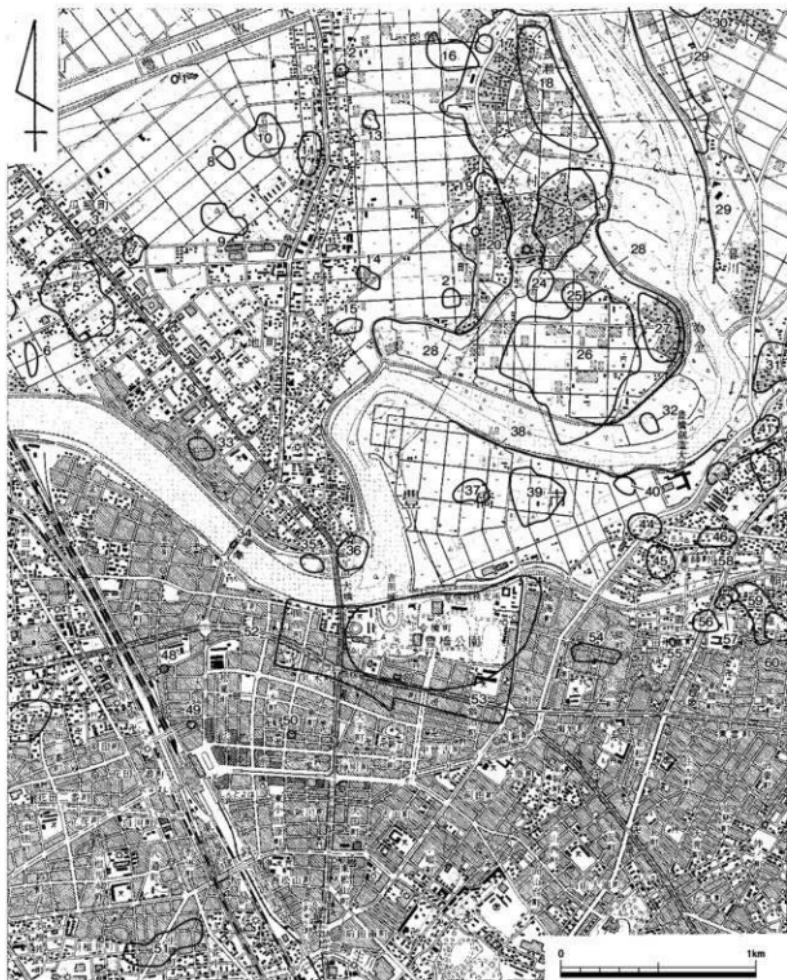
吉田城の地割が大きく変化したのは、豊臣秀吉政権下の天正18（1590）年に池田照政の吉田転封後とされる。池田照政の吉田転封は、徳川家康の関東転封に際し、豊臣秀吉が家康を牽制する目的で東海道沿いに豊臣大名を配したことによる。照政が吉田に在城した10年の間に、吉田城は戦国城郭から高石垣、瓦葺きを備えた織豊城郭へ変貌を遂げる。これまでの調査や研究成果により、当時の吉田城は東海道の拠点の城として恥じない規模であったことが明らかとなっている（三浦2006）。この時、三の丸にあった家臣團の屋敷地は、地割の改変と城域の拡大に伴い、三の丸の外側に移された（岩原2006）。江戸時代に入つてからは、武家屋敷地の外側に縦構が設けられたほか（高田2006）は、小規模な改変はあったものの、吉田城の基本的な構造は変わらなかったと考えられている。

近代以降、吉田城址の中心部（本丸～三の丸）には陸軍歩兵第十八聯隊が置かれた。陸軍による改変があるものの、周辺が都市化する中、吉田城址の中心部の遺存状態は比較的良好とされている。一方、三の丸より外側では現在に至るまで都市化が進行し、現状からは往時を偲ぶことは難しい。

周辺の遺跡

縄文時代

縄文時代には気候変動の影響により、海岸線が時期によって変化する。縄文海進がピークを迎える縄文前期には、現在の豊川放水路と豊川本流との分岐点近くまで海岸線が陸地に入り込んだと考えられている。これより時期が遡ると、豊川左岸の河岸段丘上に眼鏡下池北遺跡や浪ノ上遺跡などの縄文早期前半の遺跡が分布するが、河口の沖積地の様相は不明である。一方、縄文前期には石塚貝塚（48）が、縄文前～中期には洗島遺跡（41）があり、いずれも段丘上に立地し、豊川氾濫原である沖積地への積極的な進出は確認できない。やがて海岸線の後退と共に沖積地が発達する。縄文晩期になると人間の沖積地への進出が顕著となる。五貫森貝塚（10）ではヤマトシジミ主体の貝層と土器棺墓・土坑



- 1 塙田 2 改正 3 一新替 4 南田 5 瓜郷 6 宗正 7 高道 8 大塚北 9 大塚 10 五貫森貝塚 11 大蚊里貝塚 12 橋元
 13 島 14 大ノ前 15 大仄 16 梶西 17 松ノ木田 18 上ノ畑 19 袋小路 20 仲田 21 九藏 22 ごんぞうぼうう古墳 23 下河原
 24 塩田 25 善蔵 26 為河原郷 27 北川原 28 大村霞堤 29 下条霞堤 30 合倉 31 西側 32 高山 33 下地館址 34 豊川河床
 35 外畑 36 緑 37 長畑 38 牛川霞堤 39 宝塚 40 水洗 41 洗島 42 牛川焼窯址 43 田ノ上 44 薬師 45 南台 46 薬師寺
 47 百北 48 石塚貝塚 49 清源寺跡址 50 喜見寺跡址 51 刈根井 52 吉田城址 53 鮎海 54 埋 55 東田古墳 56 東郷
 57 仁連木西 58 蓼郷城址 59 仁連木 60 二連木城址

第2図 周辺遺跡分布図（1/25,000）（国土地理院「1：25,000地形図 豊橋」に加筆）

墓が検出され、出土土器は五貫森式の標識資料となっている。大蚊里貝塚（11）でもヤマトシジミ主体の貝層が検出されている。沖積地の土壤が乾燥し、安定した時期に、河口部へ人間の活動領域が拡大したと解釈すべきであろうか。

弥生時代

弥生時代になると、沖積地への進出がより顕著となる。時期不詳の遺跡があるが、弥生前期では大塚北遺跡（8）のみであったものが、弥生中期には瓜郷遺跡（5）、大塚北遺跡、大塚遺跡（9）、緑遺跡（36）、長畠遺跡（37）と遺跡数が大幅に増加する。特に、瓜郷遺跡では木製農耕具や炭化米が出土し、弥生中～後期に豊川河口の沖積地において本格的な水稻農耕が営まれていたことを裏付けている。繩文晩期に顕在化した人間活動の沖積地への進出傾向は弥生時代に引き継がれたと考えられる。その一方、豊橋市内では、弥生前期の環壕集落である白石遺跡、弥生中～後期の方形周溝墓と環壕を検出した高井遺跡、弥生中～後期の集落址の西側遺跡（31）など、段丘上に立地する遺跡も見られる。

古墳時代

古墳時代になると内陸の石巻地区を中心に古墳が分布するが、豊川河口付近にも古墳や人間の活動痕跡が見られる。時期不詳だが、遺物散布地としては大ノ前遺跡（14）、下河原遺跡（23）、為河原郷遺跡（26）が、滅失した古墳としてはごんぼうぞう古墳（22）がある。南田遺跡（4）では、明確な遺構は確認されなかったが、古墳中期の遺物がまとまって出土している。一方、豊川左岸の段丘上にも、洗島遺跡、田ノ上遺跡（43）、南台遺跡（45）、鮫海遺跡（53）が分布する。この他、西側遺跡（31）では古墳中～後期の竪穴建物跡群が検出されている。羽根井遺跡（51）では古墳後期の土坑から甕が出土し、祭祀遺構とされている。東田遺跡では古墳後期の住居跡が検出されている。東田古墳（55）は5世紀の前方後円墳で、豊橋市内では数少ない埴輪が出土した古墳である。

古代・中世

古代の吉田城址付近には、伊勢神宮の荘園である鮫海神戸・吉田御籠があったとされる。現在の安久美神戸神明社を中心として広がっていたとされ（歌川1973）、これは鮫海遺跡に相当すると考えられる。吉田城址第17次調査では縦柱建物が検出されており8～9世紀前半の官衙的建物である可能性が指摘されている。この他にも、周辺の低地や段丘上に遺跡が分布する。伊勢神宮領は室町時代まで存続するが、次第に現地神官らが個別に荘園を支配していく。

戦国時代になると、田原の戸田氏が築城した二連木城址（60）をはじめ、徳川家康が東三河攻略の際に築いたとされる喜見寺砦址（50）などがある。豊橋市内には戦国時代の城址・砦址あるいは古城・古屋敷の記録・伝承が残る。市内各地に分散し、概して規模が小さいとされるが、市街中心部に位置するものは、現状では遺構を確認できない。そのため、正確な規模の把握と共に、これらの城主が半士半農の土豪層であったのか専業武士である国人層であったのかが問題となる。今橋城を築いた牧野氏はかつて土豪と考えられていたが、近年は国人であるとされる（小和田2006）。近世以降は、前項に従い省略する。

第2章 調査の目的と経過

1. 調査に至る経過（第3図）

豊橋市八町通三丁目124・125において個人住宅の新築が計画され、平成25年5月20日付で文化財保護法第93条第1項に基づく埋蔵文化財発掘の届出が提出された。計画では、現地表面をほぼ設計G.L.とし、これより下1.5mまで表層改良を行うというものであった。対象地は、埋蔵文化財包蔵地（吉田城址）に該当するため、事前に試掘確認調査を行い、遺跡の有無及び内容の確認を行った。

試掘確認調査では、工事による掘削深度内で遺構面を確認したため、発掘調査が必要と判断し、豊橋市教育委員会では同年9月9日より記録保存を目的とする緊急発掘調査を行った。調査区は、地盤改良（表層改良）工事が行われる範囲（東西約14m×南北約16m）とし、調査面積は230m²である。

2. 調査の経過と方法

敷地のほとんどが調査対象となり、また排土の搬出が他所では難しいため、調査区は対象地を東側（東西約7m×南北約16m）と西側（東西約7m×南北約16m）とに半分に分割して調査を進めた。発掘調査では、西側から作業を進めているが、いずれも表土除去は重機によった。



第3図 調査区位置図 (1/2,500)

調査区は一辺10m四方のグリッドを任意に設定して行っているが、地区名は表土剥ぎの関係から最初に調査を進めた西側をW-1区、W-2区、後から行った東側はE-1区、E-2区とした。座標については、R T K - ネットワーク型G P S測量によって求めた。

いずれの地区も、遺構の掘り下げは人力で進めた。遺物の取り上げは遺構ごと・埋土ごとを行い、遺構に伴わない遺物はグリッドごとに取り上げた。調査中は、適宜、図面・写真等を用いた記録を行った。発掘調査は、同年10月4日に埋め戻し等を行い終了した。

なお、本調査区は、吉田城南側の総構（外堀）に近い藩士屋敷地内に当たると予想された。調査区の南側で検出された遺構（S D - 1）は、総構である可能性が非常に高いものであったが、調査後の建物建設では掘削が及ばないため、完掘はしていない。

第3章 遺構と遺物

1. 遺構（第4・5図）

第43次調査区は、吉田藩土屋敷地に当たる。調査区は、南北15m、東西13mの長方形であるが、地区的設定については表土剥ぎの関係から西側をW-1・2区と、東側をE-1・2区とする任意のグリッドを設定した。

基本層序は、表土・造成土等が60~80cm程堆積し、その下では土壌盛土や旧表土と考えられる土層を観察した。地山は黄褐色砂礫土層で、地山面は標高9.2m程を測り比較的平坦となる。

検出された遺構には、溝（SD）、堀（SA）、井戸（SE）、土坑（SK）がある。以下、遺物が出土している遺構を中心に説明していく。

土壌

調査区の南側では、外堀（SD-1）が確認され、それに伴う土壌が北側に想定された。土壌の多くは既に削平されていたが、その規模の概要は土層断面図や遺構の検出状況から推測できる。

SD-1北側の肩部から幅約4~5mの範囲には、縦構（外堀）が掘削されたとされる17世紀以前の遺構は確認されていない。また、土層断面（B-B'ライン）から確認される15層は土壌盛土の可能性が高く、その下の5層は旧表土と考えられる。この部分から計測できる土壌の幅は約6mであり、外堀を掘削した際の地山土などが盛土として使用されたようである。

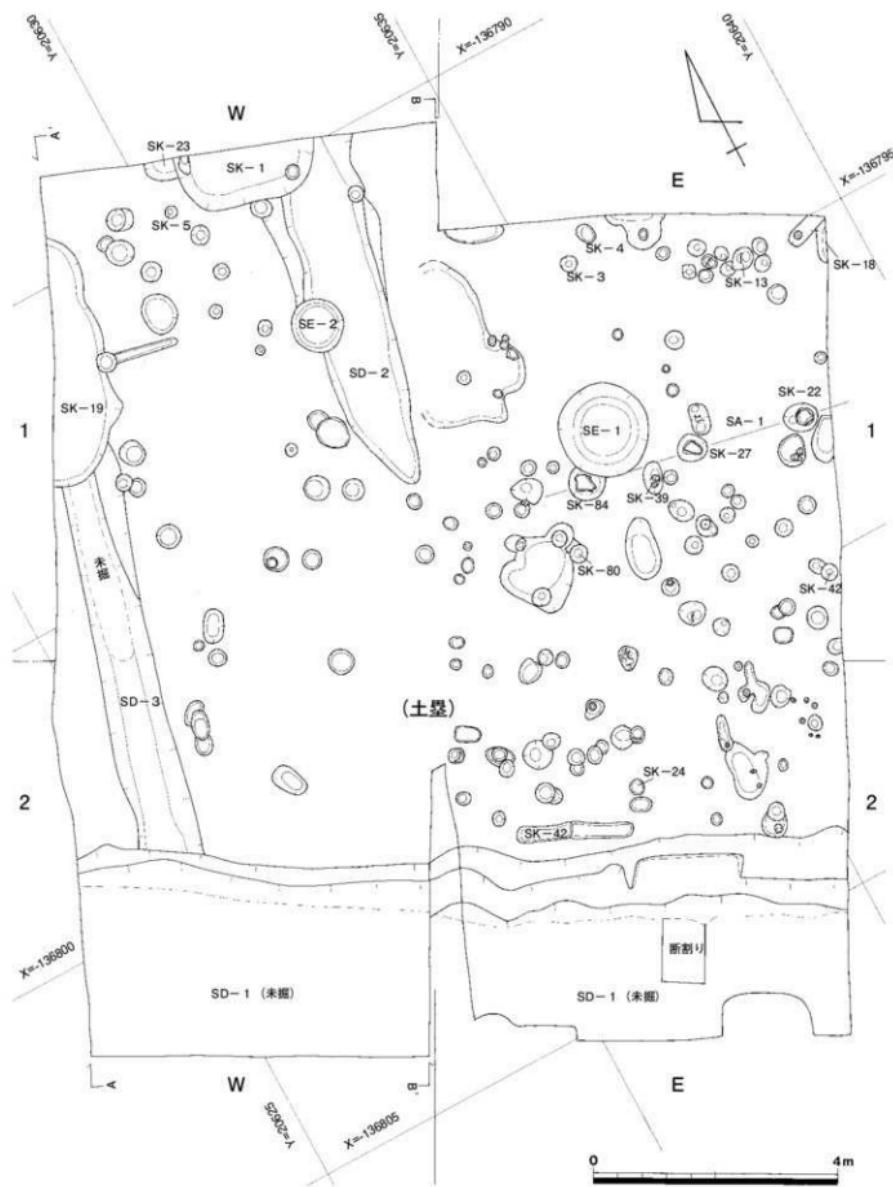
SD-1

調査区の南端を東西方向（N-60°-W）に直線的に延びる吉田城外堀と考えられる溝で、規模は現況で長さ12.5m、幅3.3m程を測る。溝の掘り下げは、建物基礎の設計深度の関係から現地表下1.5m程の深さで止めている。一部は深さ2m程まで掘り下げたが、溝底は確認できていない。また溝の断面形状もはっきりしないが、土層断面にもあるように、かなり急に落ち込んでいることが分かる。埋土については、暗褐色砂質土や灰褐色混練砂質土など土壌からの流入土が確認できる。

出土した遺物には、須恵器壺、灰釉系陶器小皿・鉢・甕、陶管、磁器碗、土師器小皿等（第6図1・2）があり、多くは溝掘削以前のものである。陶管などが出土していることから、明治期以降に埋められた可能性が考えられる。

SD-2

調査区の北側ほぼ中央にあり、南北方向（N-10°-E）に直線的に延びるもので、SE-2やW-1区SK-1に切られている。規模は、幅1.8m以上で、長さ5.7mを測る。溝の断面は、浅い皿状で、深さは33cm程となる。北端と南端との高低差は3cm程で、南から北に向かって僅かに低くなる。埋土は、茶褐色砂質土である。出土遺物には、須恵器片、灰釉系陶器碗・甕、古瀬戸折縁皿、土師器小皿等（第6図3~8）があり、遺構は15世紀前半のものであろう。



第4図 調査区全体図 (1/80)

S D - 3

調査区の西側にあり、南北方向（N-15°-E）に直線的に延びるもので、S D-1やW-1区S K-19に切られている。規模は、幅1m程で、長さ6.2mを測る。溝の断面は、浅い「U」字状で、深さは21cm程となる。溝の傾斜は北から南に向かって低くなるようであるが、完掘部分が少なくはつきりしない。埋土は、暗黄褐色砂質土である。出土遺物は土師器小片のみであり、遺構の時期ははつきりしないが、遺構の切り合い関係から15世紀以前の可能性が高い。

S A - 1

径0.5~0.6mの礎石のある柱穴が、約1.8m間隔で並んでいるため、壠状遺構と考えた。東西方向（N-79°-W）に続くが、東側は調査区外となりはつきりしない。いずれの柱穴からも遺物は出土していないため、遺構の時期は不明。S E-1に伴う目隠し塀などの可能性も考えられる。

S E - 1

調査区東側でS A-1のすぐ北側にある。規模は、上場が径1.5m程で、深さ50cm程まで掘り下げて止めている。井戸の内側には、径1.1m程で厚さ10cm程の三和土が巻かれている。出土遺物には、陶器瓶掛、磁器皿・蓋等（第6図9~12）があり、遺構は19世紀前半のものであろう。

S E - 2

調査区の中央北側にあり、S D-1を切っている。規模は、上場が径0.9m程で、深さ60cm程まで掘り下げて止めている。井戸の内側には、陶製の井戸枠（径0.8m）が見られる。出土遺物には、陶器灯明皿・片口鉢、ガラス瓶等（第6図13・14）があり、遺構は19世紀後半以降のものであろう。

W-1区SK-1

平面形は楕円形と推測されるが、半分ほどが調査区外のためはつきりしない。規模は長径2.3m以上×短径0.9m以上で、底面は中心に向かって緩やかに傾斜し、深さは38cm程を測る。埋土は、暗灰色粘質土である。出土した遺物には、灰釉系陶器碗、陶器碗、土師器小皿、軒丸瓦、棟瓦等（第6図15~19）があり、遺構は18世紀後半~19世紀前半であろう。

W-1区SK-5

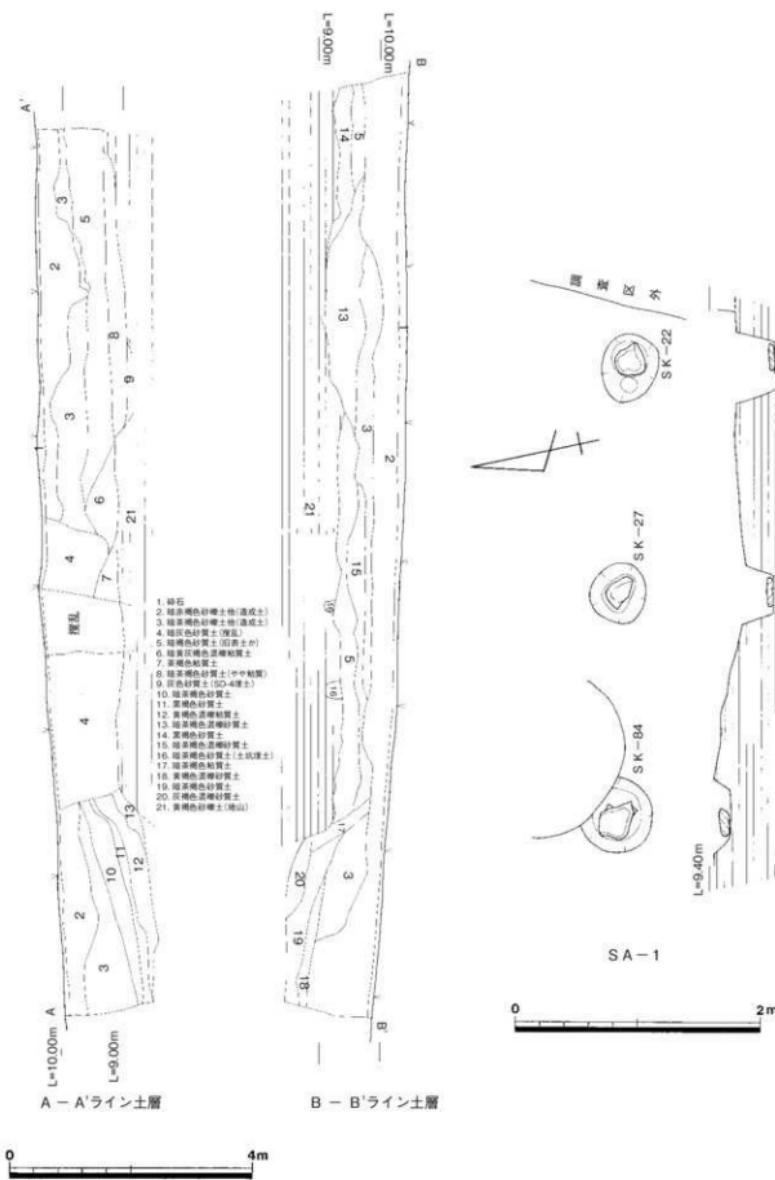
平面形は円形で、規模は径0.2m、深さ29cm程を測る柱穴状の土坑である。埋土は、暗灰色砂質土である。出土した遺物には、土師器鍋、銅製釘等（第6図20）があり、遺構の時期は19世紀前半以降であろう。

W-1区SK-19

平面形は長楕円形と推測されるが、半分以上は調査区外のためはつきりしない。規模は長径4.1m以上×短径0.9m以上で、底面は中心に向かって緩やかに傾斜し、深さは32cm程を測る。埋土は、暗茶褐色砂質土である。出土した遺物には、灰釉系陶器碗・甕、土師器鍋等（第6図21・22）があり、遺構は15世紀代であろう。

W-1区SK-23

平面形は円形と推測されるが、W-1区SK-1に切られたり調査区外となるためはつきりしない。規模は径0.5m以上、深さは7cm程を測る。埋土は、茶褐色砂質土である。出土した遺物には、灰釉系陶器小皿（第6図23）があり、遺構は13世紀代であろう。



第5図 調査区土層断面図・壙状遺構実測図 (1/80・1/40)

E-1区SK-3

平面形は円形で、規模は径0.3m、深さ36cm程を測る柱穴状の土坑である。埋土は、暗茶褐色砂質土である。出土した遺物には、灰釉系陶器小皿等（第6図24）があり、遺構の時期は13世紀代であろう。

E-1区SK-4

平面形は円形で、規模は径0.3m、深さ38cm程を測る柱穴状の土坑である。埋土は、暗茶褐色砂質土である。出土した遺物には、灰釉系陶器碗・小皿、土師器鍋・皿等（第6図25～28）があり、遺構の時期は13世紀代であろう。

E-1区SK-13

平面形はやや不整な円形で、規模は径0.4m、深さ35cm程を測る柱穴状の土坑である。埋土は、暗茶褐色砂質土である。出土した遺物には、常滑窯産甕（第6図29）があり、遺構の時期は13～14世紀であろう。

E-1区SK-18

平面形は円形と推測されるが、ほとんどが調査区外となるためはっきりしない。規模は径0.6m以上、深さは17cm程を測る。埋土は、暗茶褐色砂質土である。出土した遺物には、陶器鉢、土師器鍋等（第6図30）があり、遺構は18世紀代であろう。

E-1区SK-39

平面形は梢円形で、規模は長径0.5m×短径0.3mで、深さは34cm程を測る。埋土は、暗茶褐色砂質土である。出土した遺物には、灰釉系陶器碗、土師器鍋等（第6図31）があり、遺構は15世紀代であろう。

E-1区SK-42

平面形は円形で、規模は径0.3m、深さ52cm程を測る柱穴状の土坑である。埋土は、暗茶褐色砂質土である。出土した遺物には、土師器鍋等（第7図32）があり、遺構の時期は14世紀代であろう。

E-1区SK-80

平面形は円形で、規模は径0.3m、深さ36cm程を測る柱穴状の土坑である。埋土は、黒色粘質土である。出土した遺物には、土師器小皿・焼土等（第7図33・34）があり、遺構の時期は16世紀前後のものであろう。

E-2区SK-24

平面形は円形で、規模は径0.2m、深さ41cm程を測る柱穴状の土坑である。埋土は、暗茶褐色砂質土である。出土した遺物には、土師器鍋等（第7図35）があり、遺構の時期は14世紀代であろう。

E-2区SK-42

平面形は長梢円形で、規模は長径0.9m×短径0.3mで、底面は比較的平坦となり深さは5cm程を測る。埋土は、暗茶褐色砂質土である。出土した遺物には、土師器碗（第7図36）があり、遺構は13世紀前後であろう。

2. 遺物 (第6・7図、第1表)

出土した遺物には、須恵器・灰釉系陶器・陶器・磁器・土師器・瓦・金属製品などがあり、遺物用コンテナ (60×40×20cm) に2箱分となる。

S D - 1 (1・2)

1は須恵器壺で、底部は平坦で比較的しっかりした高台が付くが、使用のためか摩滅が著しい。体部外面下半が回転ヘラケズリ、これ以外は回転ナデ。8世紀代のものと考えられ、混入品。

2は土師器鍋で、半球形となる。口縁部は内湾気味に伸び、端部は内傾した面となる。口縁端部ヨコナデ、内面ナデ・板ナデ、外面ナデ・指オサエ。外面に煤が付着。16世紀代のものと考えられる。

S D - 2 (3~8)

3は陶器皿で、折縁皿と考えられる。底部は平坦で、体部は外上方に伸び口縁部付近で外方に屈折する。体部外面下半回転ヘラケズリ、これ以外は回転ナデ。内外面に灰釉が掛かる。古瀬戸編年後Ⅲ～IV期頃、15世紀前半のものであろう。4～8は土師器小皿。4は口縁部が丁寧にヨコナデされ、明確に立ち上がる。5・7の口縁部は内湾気味に立ち上がり、6・8の立ち上がりは緩やかとなる。5～8の調整は、内面ナデ、外面ナデ・指オサエ。これらは、3に伴う時期のものであろう。

S E - 1 (9~12)

9は瓦質陶器瓶掛で、体部は丸みを帯び、口縁部は小さく外方に開く。外面は貼付文で、内外面回転ナデによる調整。10は磁器皿で、口縁部は外方に屈折しながら開く。高台部は削り出し。内面に染付による絵が見られる。11は磁器皿で、口縁部は内湾気味に緩やかに立ち上がる。高台部削り出し。12は磁器蓋で、立ち上がりは短く、三方に半円形の切れ込みがある。天井部は低く頂部は一段低くなる。これらは、19世紀前半のものであろう。

S E - 2 (13・14)

13は陶器灯明皿で、底部は平坦で口縁部は外上方へ伸びる。底部外面回転ヘラケズリ、これ以外は回転ナデ。底部外面以外に長石釉が掛かる。19世紀前半のものであろう。

14はカラス小瓶で、側面や底面に「直治水」、「丹平商會」、「丹平」とある。明治期の目薬瓶であろう。

W - 1 区 S K - 1 (15~19)

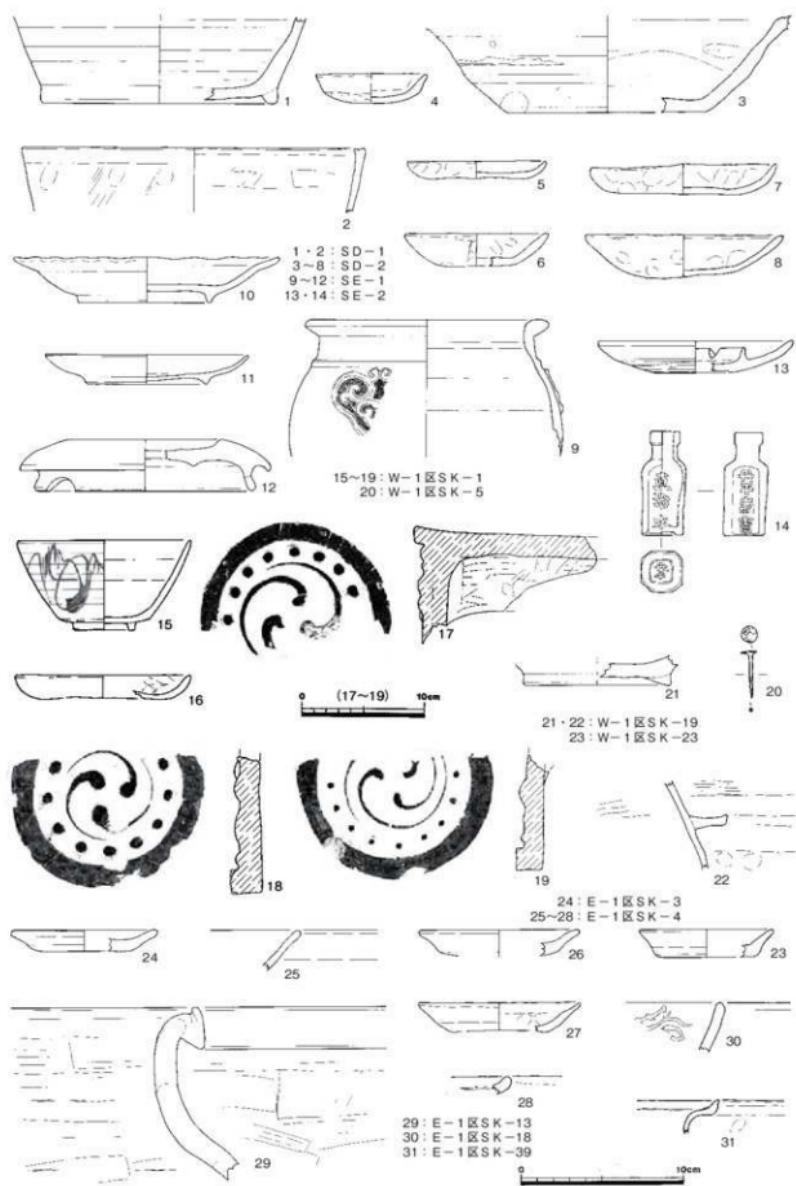
15は陶器平碗で、底部は平坦で口縁部は外上方へ直線的に伸びる。高台部削り出し。内外面回転ナデ。内外面に灰釉が掛かる。外面に鉄絵の柳文。16は土師器小皿で、口縁部は緩やかに立ち上がる。内面ナデ・板ナデ、外面ナデ・指オサエ。17～19は軒丸瓦で、瓦当はいずれも朱文十三つ巴文となる。巴文は細く長いものとなる。これらは、18世紀後半～19世紀前半のものであろう。

W - 1 区 S K - 5 (20)

20は銅製の釘で、断面は円形。笠部は円形で平坦となる。近世～近代。

W - 1 区 S K - 19 (21・22)

21は灰釉系陶器碗で、高台部は低いがしっかりとした高台が付く。13世紀代のものであろう。



第6図 出土遺物実測図-1 (1/3・1/4)

22は土師器茶釜形鍋で、体部は内傾気味に伸び、内面ナデ、外面ハケメ調整。外面には比較的幅の広い鶴が付き、下半には煤が付着する。丁寧なヨコナデ調整。15世紀代か。

W-1区SK-23 (23)

23は灰釉系陶器小皿で、底部は平坦で口縁部は小さく立ち上がる。底部外面糸切りと考えられ、これ以外は回転ナデ。13世紀代のものであろう。

E-1区SK-3 (24)

24は灰釉系陶器小皿で、底部は平坦で口縁部は小さく立ち上がる。底部外面糸切り、これ以外は回転ナデ。13世紀代のものであろう。

E-1区SK-4 (25~28)

25・26は灰釉系陶器。25は碗で、口縁部は外上方へ伸びる。調整は回転ナデ。26は小皿で、底部は平坦で口縁部は小さく立ち上がる。底部外面糸切り、これ以外は回転ナデ。27は土師器皿で、底部は平坦で口縁部は外上方に直線的に伸びる。口縁部ヨコナデ、内面ナデ・指オサエ。28は土師器鍋で、いわゆる伊勢型鍋。これらは、13世紀代のものであろう。

E-1区SK-13 (29)

29は灰釉系陶器甕で、常滑窯産。口縁部は大きく外反し、端部は肥厚し、平坦な面となる。口縁部ヨコナデ、体部内外面は板ナデ。13~14世紀のものであろう。

E-1区SK-18 (30)

30は陶器鉢で、口縁部は直線的に伸び、端部は丸く収める。内外面に長石釉が掛かる。18世紀代のものであろう。

E-1区SK-39 (31)

31は土師器鍋で、いわゆる伊勢型鍋。口縁部は大きく外反し、端部は小さく立ち上がる。口縁端部ヨコナデ、外面ナデ・指オサエ。15世紀代のものであろう。

E-1区SK-42 (32)

32は土師器鍋で、いわゆる伊勢型鍋。口縁部は大きく外反し、端部は緩やかに内傾する。口縁端部はヨコナデによる調整。14世紀代のものであろう。

E-1区SK-80 (33~34)

33・34は土師器小皿で、いずれも口縁部は小さく立ち上がる。内面ナデ、外面ナデ・指オサエによる調整。16世紀前後のものであろう。

E-2区SK-24 (35)

35は土師器鍋で、いわゆる伊勢型鍋。口縁部は大きく外反し、端部は緩やかに内傾する。外面に煤付着。口縁端部はヨコナデ、体部内面はハケメによる調整。14世紀代のものであろう。

E-2区SK-42 (36)

36は土師器碗で、口縁部は外上方に直線的に伸び、端部は小さく屈曲しながら丸く収める。内外面は回転ナデによる調整。13世紀前後のものであろう。

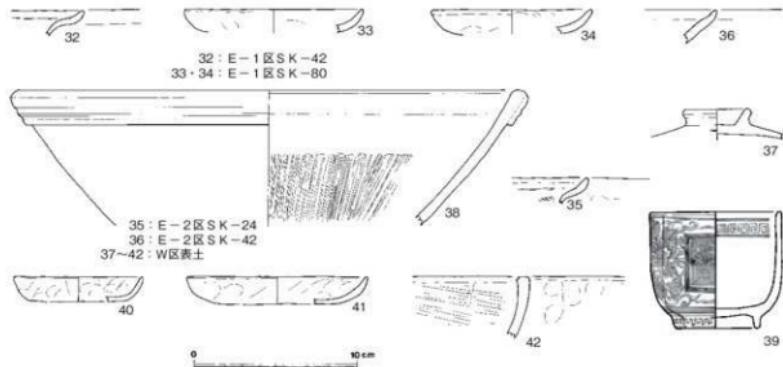
W区表土 (37~42)

37は陶器蓋で、頂部に環状の摘みが付く。内外面に透明釉が掛かる。

38は陶器擂鉢で、口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は折り返して肥厚する。内面の描り目は細かい。内外面回転ナデ。

39は磁器碗で、体部は筒状となり口縁部は丸く収める。高台部削り出し。内外面に染付。なお、この碗は、底部も含め二つに割れていたものが膠によって繋がっていた。

40~42は土師器。40・41は小皿で、口縁部は緩やかに立ち上がる。内面ナデ・外面ナデ・指オサエ。42は半球形鍋で、口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は面となる。口縁端部ヨコナデ・内面板ナデ・外面ナデ・指オサエ。



第7図 出土遺物実測図-2 (1/3)

第1表 出土遺物觀察表

回-番号	地区	通稱	器種	分類	口径	高さ	底径	その他	版土	焼成	色調	調査等	備考
6 -1	W-2	SD-1	S	壺		(5.3)	14.5		青	良好	淡灰白色	底部外面ナデ	高台部の摩滅著しい。
2	W-2	SD-1	H	罐	20.8	(3.9)			青	良好	淡褐色	口縁部ココナデ	半球形罐
3	W-1	SD-2	T	鉢形罐		(5.9)	12.2		青	良好	淡乳白色	底部外面削れヘラケズリ	内外面に灰釉
4	W-1	SD-2	H	小壺	6.8	1.8			青	良好	淡乳白色	口縁部ココナデ	
5	W-1	SD-2	H	小壺	8.3	1.1			青	良好	淡褐色	内外面ナデ・指オサエ	
6	W-1	SD-2	H	小壺	8.8	2.0			青	良好	淡乳白色	内面丁寧なナデ	
7	W-1	SD-2	H	小壺	11.4	1.9			青	良好	淡乳白色	内外面ナデ・指オサエ	
8	W-1	SD-2	H	小壺	12.2	2.6			青	良好	淡褐色	内外面ナデ・指オサエ	
9	E-1	SE-1	T	頸掛	14.4	(8.4)	16.8		青	良好	淡乳褐色	内外面削れナデ	瓦質
10	E-1	SE-1	Z	瓶	16.4	2.8	8.3		青	良好	白色	高台部削り出し	内面に染付
11	E-1	SE-1	Z	瓶	12.5	1.8	7.4		青	良好	白色	高台部削り出し	
12	E-1	SE-1	Z	壺	15.4	3.2	13.2	受け深部	青	良好	白色	天井深削れヘラケズリ	
13	W-1	SE-2	T	打明頭	11.8	2.0	4.4		青	良好	淡乳白色	底部外面削れヘラケズリ	内外面に長石種
14	W-1	SE-2	G	小瓶	1.7	6.4		底部一辺 2.5	青	良好	淡乳白色	直泊本 丹平尚舟	
15	W-1	SK-1	T	平瓶	10.7	5.5	3.8		青	良好	淡乳色	高台部削り出し	内外面に灰釉
16	W-1	SK-1	H	小壺	10.7	2.0			青	良好	淡乳白色	内外面ナデ・指オサエ	
17	W-1	SK-1	N	秆丸瓦	往15.2				青	良好	淡乳色	丸瓦溝ナデ・板ナデ	巴文+朱文
18	W-1	SK-1	N	秆丸瓦	往15.8				青	良好	淡乳色	瓦当内面ナデ	巴文+朱文
19	W-1	SK-1	N	秆丸瓦	往15.2				青	良好	淡乳色	瓦当内面ナデ	巴文+朱文
20	W-1	SK-5	I	剣	長2.9								削製
21	W-1	SK-19	P	瓶		(1.8)	8.8		青	良好	淡乳色	底部外面ナデ	
22	W-1	SK-19	H	茎葉形罐		(5.5)			青	良好	淡褐色	跨部ココナデ	跨下部に復付着
23	W-1	SK-23	P	小瓶	8.1	1.7	5.8		青	良好	淡灰色	口縁深削れナデ	
24	E-1	SK-3	P	小瓶	8.6	1.3	5.4		青	良好	淡灰色	底部外面余切り	
25	E-1	SK-4	P	瓶		(2.5)			青	良好	淡乳色	口縁深削れナデ	
26	E-1	SK-4	P	小瓶	9.8	(1.6)			青	良好	淡乳色	口縁深削れナデ	
27	E-1	SK-4	H	瓶	9.8	1.9			青	良好	淡褐色	口縁深ココナデ	
28	E-1	SK-4	H	瓶		(1.1)			青	良好	淡褐色	口縁深ココナデ	伊勢型鏡
29	E-1	SK-13	P	甕		(10.7)			青	良好	淡褐色	体部の外側ナデ・板ナデ	奈良堂窯
30	E-1	SK-18	T	甕		(3.0)			青	良好	淡乳白色	口縁深削れナデ	内外面に長石種
31	E-1	SK-39	H	罐		(2.0)			青	やや不 良	淡褐色	口縁深ココナデ	伊勢型鏡
7 -32	E-1	SK-42	H	罐		(1.7)			青	やや不 良	淡褐色	口縁深ココナデ	伊勢型鏡
33	E-1	SK-80	H	小壺	10.8	(1.4)			青	良好	淡乳褐色	内外面ナデ・指オサエ	
34	E-1	SK-80	H	小壺	9.8	(1.5)			青	良好	淡乳褐色	内外面ナデ・指オサエ	口縁部に復付着
35	E-2	SK-24	H	罐		(1.7)			青	良好	淡褐色	口縁深ココナデ	外面に復付着
36	E-2	SK-42	H	甕		(2.1)			精良	良好	淡褐色	口縁深削れナデ	
37	W-1-2	表土	T	壺		(1.9)		摘み目4.2	青	良好	淡乳褐色	極み深削れヘラケズリ	内外面に透明釉
38	W-1-2	表土	T	鉢	31.9	(8.4)			青	良好	淡褐色	口縁深削れナデ	内外面鉄輪
39	W-1-2	表土	Z	甕	7.9	7.2	5.2		青	良好	白色	高台部削り出し	甕による補修痕あり
40	W-1-2	表土	H	小壺	7.8	(1.6)			青	良好	淡褐色	内外面ナデ・指オサエ	
41	W-1-2	表土	H	小壺	11.0	1.7			青	良好	淡乳白色	内外面ナデ・指オサエ	
42	W-1-2	表土	H	甕		(3.8)			青	良好	淡褐色	内外面ナデ	

※器種記号 H-土器類 S-須恵器 P-灰陶系陶器 T-陶器 Z-磁器 N-瓦 G-ガラス製品 I-金銀製品

法量の単位はcm。()は残存部数。底注には、開拓区と高台区を含む。

第4章 総括

吉田城址第43次調査の最大の成果は、総構（外堀）とこれに伴う土塁の確認である。溝SD-1とした遺構は、その位置や大きさから外堀と考えられ、これに伴う土塁の位置や規模も推測できた。

吉田城下の発掘調査のうち外堀部分の調査としては、第8次調査（愛知県東三河事務所（現東三河県庁）建設に伴う発掘調査 注1）と第38次調査（豊城地区市民館増築工事に伴う発掘調査 注2）があるが、後者については調査区が全て堀内に当たるため規模等は確認できていない。なお、現存する外堀の土塁としては、豊橋刑務所東側に幅約10mで長さ120m程が残っている。

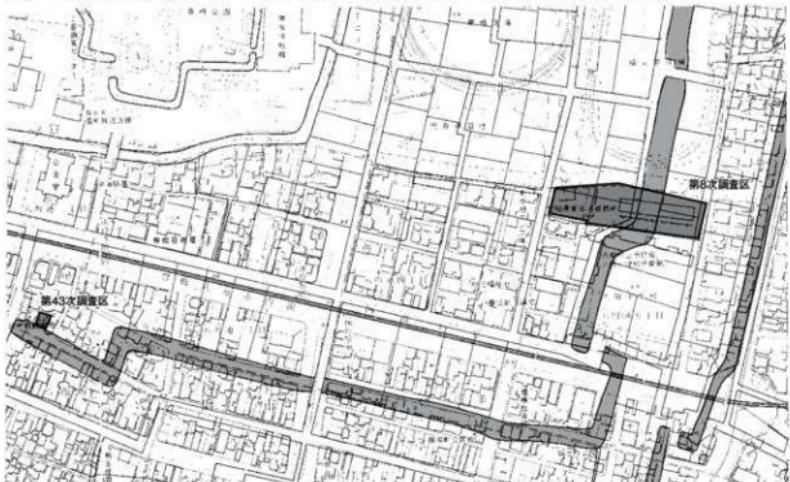
第8次調査区では、外堀の規模は幅約14m、深さ約3mであることが確認された。報告書では、土塁は確認されなかったとしているが、遺構平面図には外堀の内側において中世遺構は存在するものの近世遺構が無い箇所が幅約14mに渡って見られることから、少なくともここに土塁が存在したと推測できる。但し、この部分を描いたいくつかの絵図には、堀よりも土塁の幅が広い表現や土塁に沿って「馬場」「桜馬場」などと記されているものがあることから、幅14mが全て土塁とは言えないであろう。本調査区の外堀及び土塁については、堀幅は確認できなかったが、土塁幅は約6mと想定した。

比較的正確に描かれたとされる参州吉田城図を現況図に重ね合わせたもの（第8図 注3）を参考に外堀や土塁の規模を確認すると、第8次調査区付近では、堀+土塁+（馬場）の幅は25m程を測り、他に比べてやや広い。一方、本調査区付近では、堀+土塁の幅は約20mで平均的な広さとなっており、今回の調査区で確認された土塁の幅（6m程）は、絵図からの推測値と大きく異なるものではない。

注1 愛知県埋蔵文化財センター 1995 「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第59集 吉田城跡II」

注2 豊橋市教育委員会 2015 「豊橋市埋蔵文化財調査報告書第134集 市内埋蔵文化財発掘調査II—平成21年度—」

注3 愛知県埋蔵文化財センター 1992 「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第26集 吉田城跡」



第8図 吉田城址外堀・土塁位置図(1/5,000)※注3文献より転載

吉田城址 第43次発掘調査

写 真 図 版



1. W-1・2区全景（南から）



2. W-2区全景（南から）



1. E-1・2区全景（南から）



2. E-2区全景（西から）



1. SD-2 全景（南から）



2. SD-3 全景（南から）



3. SD-1 断面（西から）



4. SA-1（西から）



5. SA-1 SK-22（北から）



6. SA-1 SK-27（北から）

写真図版4

吉田城址第43次



3



7



9



10



12



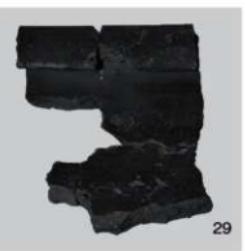
14



15



19



29



31



38



39

出土遺物

に れん ぎ じょう し
二 連 木 城 址

第5・6次発掘調査

例 言

1. 「二連木城址第5・6次発掘調査」は、平成25年度に国庫・県費補助を受けて行った二連木城址第5次発掘調査及び第6次発掘調査の報告書である。所在地、調査期間・面積及び担当については下記のとおりである。なお、執筆は第1章及び第5次調査に関する部分を久保が、その他を小林が行った。

第5次調査

○豊橋市仁連木町210-1、210-2 ○平成25年9月17日～25日
○106.5m² ○久保友香理（豊橋市教育委員会美術博物館嘱託員）

第6次調査

○豊橋市仁連木町128 ○平成25年10月7日～11月1日
○350m² ○村上 昇（豊橋市教育委員会教育部美術博物館）

2. 調査にあたり、土地所有者並びに開発事業者にはご協力を頂いた。

目 次

第1章 遺跡の立地と歴史的環境	28
第2章 調査の目的と経過	31
第3章 第5次調査	34
第4章 第6次調査	39
第5章 総括	56
写真図版	58

図版目次

第1図 豊橋南部の段丘 (1/200,000)	28
第2図 周辺遺跡分布図 (1/10,000)	29
第3図 調査区位置図 (1/2,500)	31
第4図 第5次調査区配置図 (1/130)	33
第5図 第5次調査A区全体図 (1/80)	34
第6図 第5次調査B区全体図 (1/80)	35
第7図 第5次調査A区東壁・南壁土層、B区西壁・北壁土層図 (1/50)	36
第8図 第5次調査C・D区全体図 (1/30)	37
第9図 第5次調査出土遺物実測図 (1/3)	38
第10図 第6次調査区全体図-1 (1/80)	40
第11図 第6次調査区全体図-2 (1/80)	41
第12図 第6次調査遺構実測図 (1/20・1/60)	43

第13図 第6次調査出土遺物実測図-1 (1/3・1/6)	50
第14図 第6次調査出土遺物実測図-2 (1/3)	51
第15図 第6次調査出土遺物実測図-3 (1/3・1/6)	52
第16図 第6次調査出土遺物実測図-4 (1/3)	53

表 目 次

第1表 第5次調査出土遺物観察表	38
第2表 第6次調査出土遺物観察表	54

写真図版目次

第5次調査

1-1 A区全景 (北から)	59	2 B区全景 (東から)	59
2-1 C区全景 (東から)	60	2 D区全景 (東から)	60
3 出土遺物	60		

第6次調査

3-1 調査区全景-1 (北西から)	61	2 調査区全景-2 (北から)	61
4-1 A～C区付近全景 (北西から)	62	2 D・E区付近全景 (北から)	62
5-1 D・E区全景 (南東から)	63	2 S D-5・6 及び土層断面 (北から)	63
3 S D-5 及び土層断面 (南から)	63		
6-1 A・B区付近全景 (南西から)	64	2 A区S E-1 (西から)	64
3 A区S E-1 土層断面 (北から)	64		
7-1 B区S E-3 (西から)	65	2 A区S K-6・42遺物出土状況 (南から)	65
3 A区S K-42遺物出土状況 (南から)	65		
8 出土遺物	66		

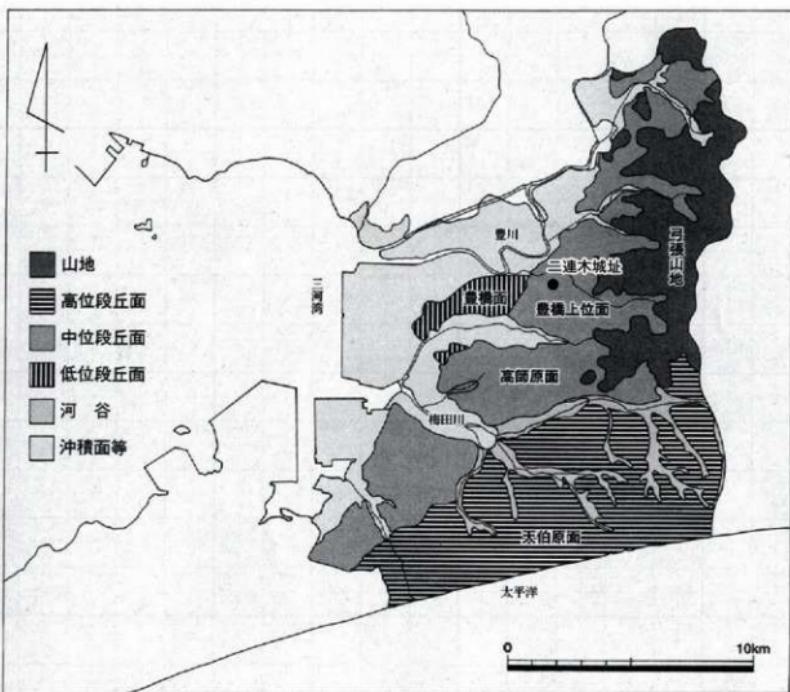
第1章 遺跡の立地と歴史的環境

1. 遺跡の立地（第1図）

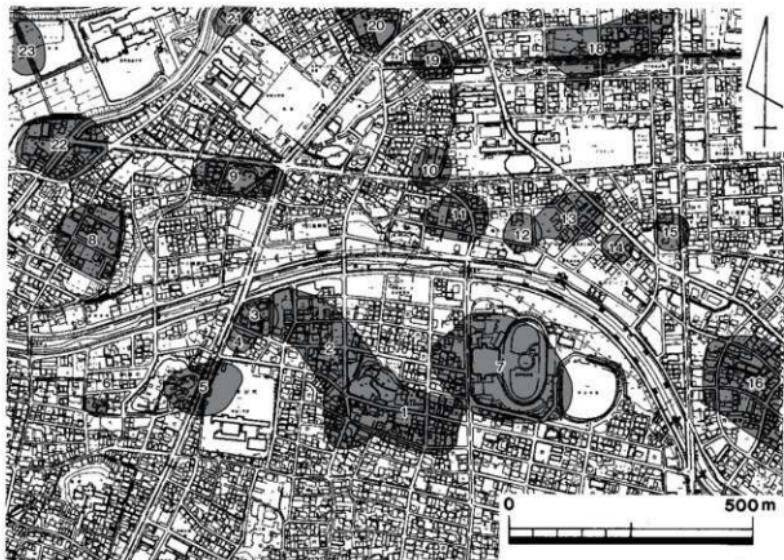
豊橋市域は、東に弓張山地、南に太平洋、西に三河湾、北に豊川を望む地域であり、人口約38万人を数える愛知県東部の中核都市である。

東部の山地や北西部の沖積低地を除くと、市域の多くは豊川と旧天竜川により形成された河岸段丘上にある。この河岸段丘は、天伯原面と呼ばれる高位段丘面（標高30～60m）、高師原面～豊橋上位面にあたる中位段丘面（標高15～30m）、豊橋面と呼ばれる低位段丘面（標高4～10m）の3面に分けられ、このうち二連木城址が立地するのは中位段丘面（豊橋上位面）である。この豊橋上位面は、向山・東田・牛川・石巻あたりに広がり、朝倉川等による僅かな開析以外はあまり浸食が進んでおらず原面は比較的平坦で残りが良い。

今回調査の対象となった二連木城址は、朝倉川左岸の段丘縁辺部に位置する。この場所は北側に向



第1図 豊橋南部の段丘 (1/200,000)



第2図 周辺遺跡分布図 (1/10,000)

かって少し突出しており、東～北～西方向に見通しが利く。また、すぐ北側は段丘崖となるため、自然地形を利用し城の防御力を高めたと考えられる。一方、城の南側は平坦であることから、防御のために外側に曲輪を連ねていったと推測されている。なお、このような河川を背後にして段丘縁辺部に城を築くという立地状況は、低位段丘面（豊橋面）に立地する吉田城と類似する。

2. 歴史的環境（第2図）

二連木城は、豊橋市仁連木町に所在する中世城館で、明応2(1493)年田原城主戸田宗光によって築かれ、以来二連木戸田氏の居城として天正18(1590)年まで存続したとされる。現在、土塁や堀の一部が大口公園内に残っているが、絵図・地籍図からその規模は、東西約200m、南北約150mと想定される。

朝倉川を挟んだ両岸の段丘縁辺部には、二連木城址を含め縄文時代から近世までの遺跡が多く分布している。ここでは、周辺遺跡の概要を時代毎に述べる。

縄文時代

朝倉川右岸の西先原遺跡（12）・東先原遺跡（13）・南牛川C遺跡（14）等で縄文土器が確認されているが、遺跡の詳細は不明である。これ以外では、仁連木町の北に位置する牛川町の眼鏡下池北遺

跡で早期の土器や煙道付炉穴、洗島遺跡で中期の土器が確認されている。

弥生時代

仁連木遺跡（2）・東郷遺跡（5）・東田遺跡（7）・南牛川D遺跡（10）・西先原遺跡（12）等で弥生土器が確認されているが、調査例が少ないため状況がはっきりしない。北側の牛川町の西側遺跡では中～後期の方形周溝墓、後期の環壕や竪穴建物等が確認されており、その土地一帯の撲点集落であったと考えられている。

古墳時代

古墳では、東田古墳（6）が段丘縁辺部の周囲より一段低い場所に位置しており、その立地は特異であるといえる。この古墳は、全長約40mを測る中期の前方後円墳で、後円部から鳥文鏡や大刀、墳丘上から円筒・形象埴輪が出土している。

集落では、東田遺跡（7）で後期の竪穴建物や溝等が確認され、これに伴う須恵器・土師器も出土している。南台遺跡（8）では、後期の須恵器が採集され、集落の存在が予想される。

古代

西先原遺跡（12）で道路状・柵状の遺構が確認されており、東先原遺跡（13）ではこれらの遺構と同時期の遺物が出土している。

中世～近世

薦鄉城址（3）は、二連木城の家老屋敷と伝わり土壘状のものが残るが詳細は不明である。仁連木西遺跡（4）・東田遺跡（7）・薦師寺遺跡（9）・南牛川A遺跡（11）・もぐら沢遺跡（15）等で中～近世の遺物が確認されており、集落の存在が推測される。北側の牛川町では、西側遺跡と東側遺跡で中～近世の掘立柱建物や溝が確認され、1つの集落を形成していたと考えられる。

参考文献

豊橋市教育委員会 1995『東田遺跡』 豊橋市埋蔵文化財調査報告書第25集

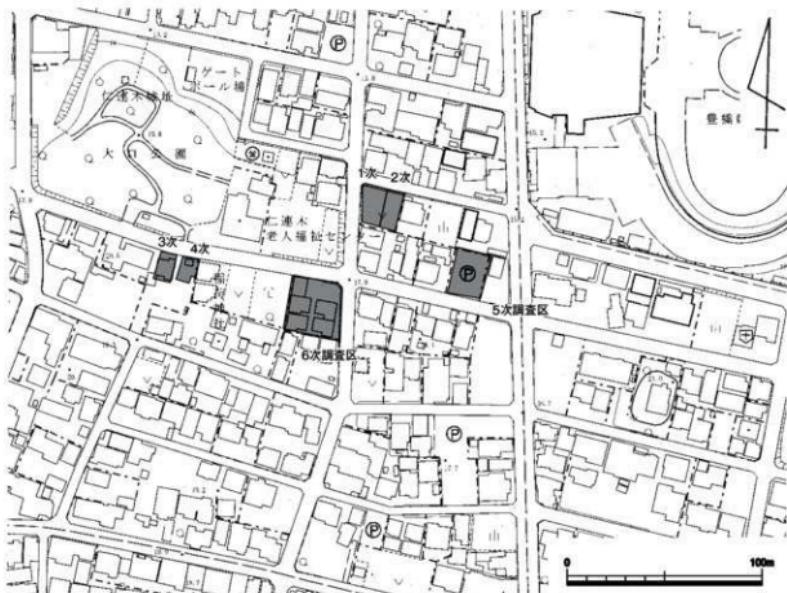
豊橋市教育委員会 2011『市内遺跡発掘調査－平成20年度－』 豊橋市埋蔵文化財調査報告書第115集

第2章 調査の目的と経過

1. 調査に至る経過（第3図）

今回行われた第5次調査は、豊橋市仁連木町210番地2において、個人住宅新設工事に伴い平成25年9月3日付で文化財保護法第93条第1項に基づく埋蔵文化財発掘の届出が提出されたことに始まる。届出によると、住宅自体の基礎は浅いが、南側の道路に面する駐車場及び北奥の擁壁部分を深掘りするため、この部分について遺跡の記録保存を行う必要があると判断し発掘調査を行うこととなった。また、東隣の豊橋市仁連木町210番地1でも上記と同じ個人住宅新設工事に伴い平成25年9月17日付で埋蔵文化財発掘の届出があったため、併せて発掘調査を行った。対象範囲は、西側の210番地2の土地では南端と北端併せて102.5m²、東側の210番地1の土地では北側と南側に南北1m×東西2mのトレンチを各1ヶ所、併せて4m²である。

統いて行われた第6次調査は、豊橋市仁連木町128番地において、集合住宅新築工事に伴い平成25年5月20日付で文化財保護法第93条第1項に基づく埋蔵文化財発掘の届出が提出されたことに始まる。この計画では、集合住宅建設及びこれに伴う駐車場の造成が行われるというもので、このうちの駐車場部分が周辺道路に合わせた高さまで大きく掘削するというものであった。このため、この調査



第3図 調査区位置図 (1/2,500)

区では事前に試掘確認調査を行い、遺跡の有無及び内容の確認を行った。

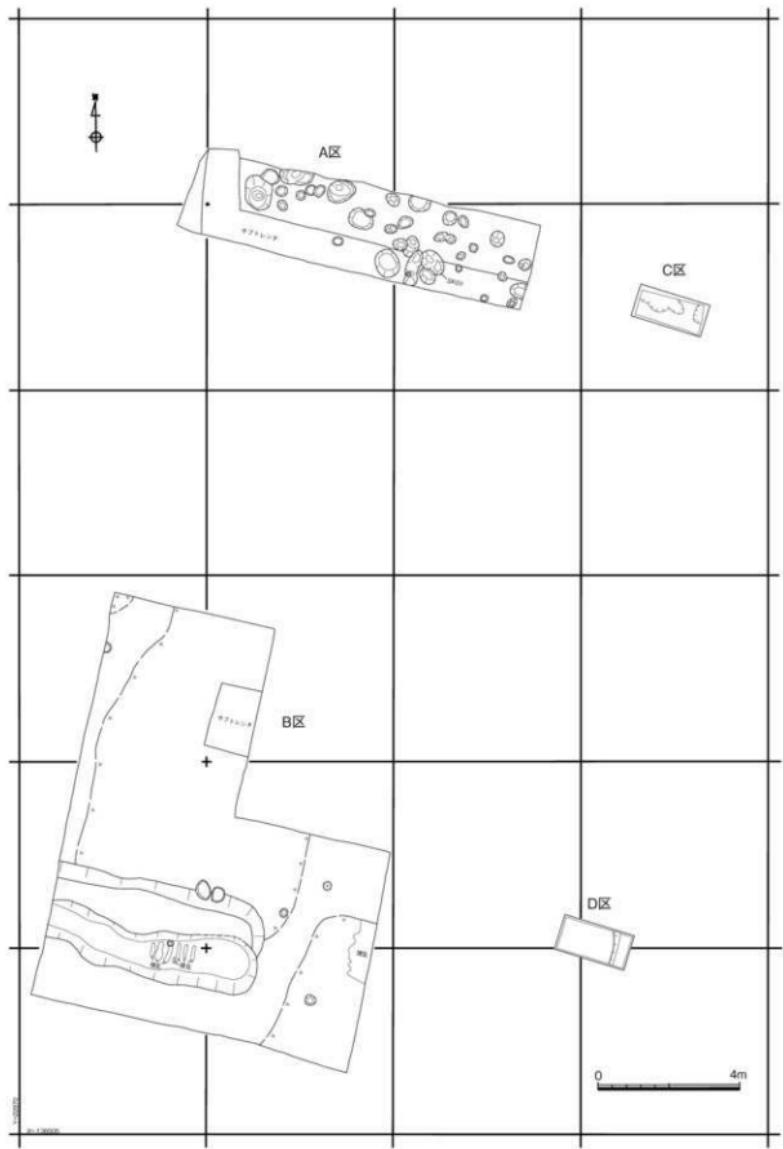
試掘確認調査では、工事による掘削深度内で遺構面を確認したため、発掘調査が必要と判断し、豊橋市教育委員会では同年10月7日より記録保存を目的とする緊急発掘調査を行った。調査区は、駐車場として地面を深く掘削工事する東西約24m×南北約27m、幅6~7mのL字状の範囲とし、調査面積は350m²である。

2. 調査の経過と方法

第5次調査は、平成25年9月17日~25日の間で行った。表土除去は重機を用いて行い、遺構検出及び掘削は人力で行った。遺構面は基本的に地山である。遺構検出と掘削を進めた後、調査区平面図と土層図の作成、写真撮影等を隨時行っている。

各調査区のグリッド設定は、RTK-ネットワーク型GPS測量によって座標を求めた。調査区名は、210番地2の北側をA区、南側をB区、210番地1の北側をC区、南側をD区とした。

第6次調査は、平成25年10月7日~11月1日の間で行った。調査の手順は、基本的に第5次調査とほとんど同じである。調査区の設定については、RTK-ネットワーク型GPS測量によって座標を求めた後、やや変則的ではあるが10mグリッドで南から北に向かってA~E区とした。



第4図 第5次調査区配置図 (1/130)

第3章 第5次調査

1. 遺構 (第5~8図)

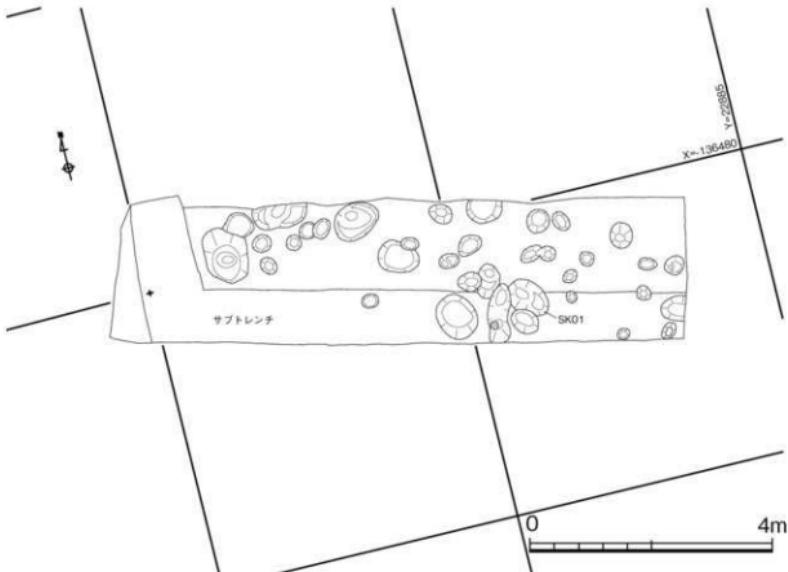
第5次調査区は、二連木城の中心となる部分（現在の大口公園付近）から東へ200m程離れた位置にある。遺構はほとんど削平されており、極僅かしか残っていなかった。また、層序は表土直下で後世の造成による搅乱を受けており、遺物包含層は残っていないかった。

A区では、径0.2~0.8m程の土坑（SK）が34基程確認されているが、遺物が出土しているものは僅かである。B区では、東西に延びる溝状遺構（SD）と5基の土坑が検出されているが、遺物を伴っているものは1基のみであった。

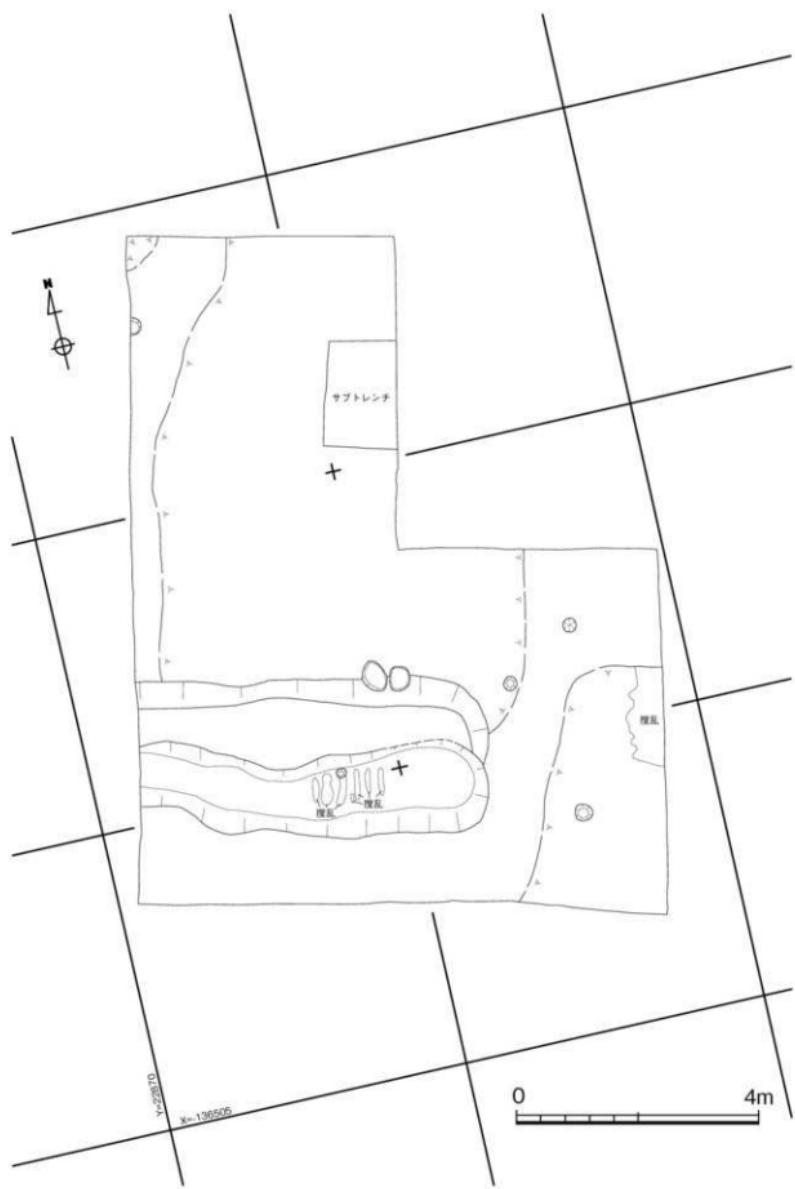
C区及びD区については、試掘確認調査のために掘り下げたもので、いずれも後世の搅乱を受けていることを確認した。

A区 SK01

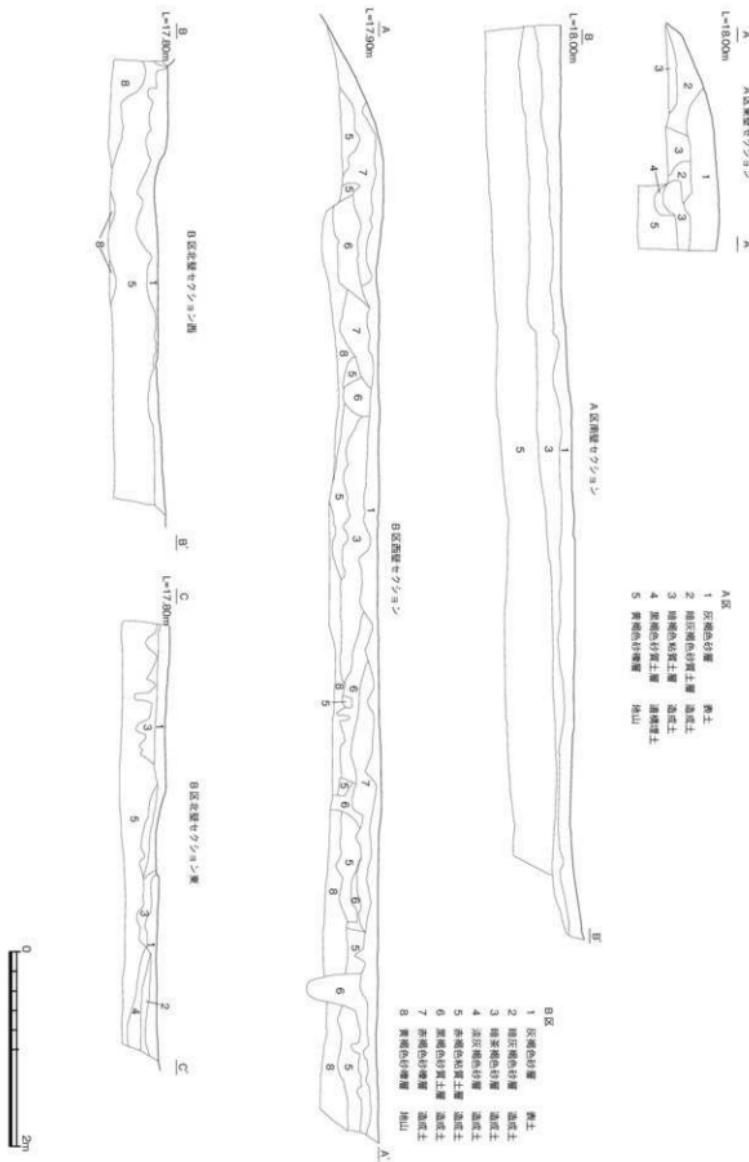
A区の中央やや東寄りで検出された楕円形の土坑で、長径0.7m、短径0.4m、深さ0.16mを測る。埋土は黒褐色砂質土である。出土した遺物には須恵器壺蓋（第9図1）があり、遺構の時期は9世紀であろう。



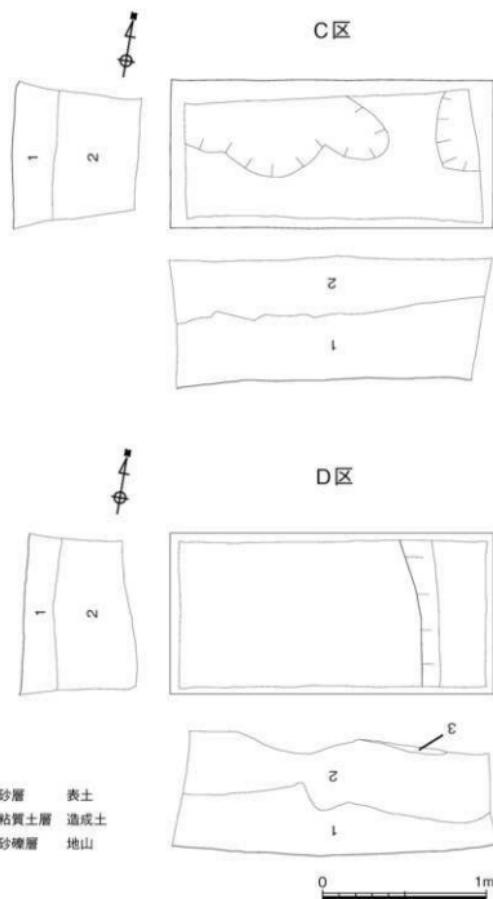
第5図 第5次調査A区全体図（1/80）



第6図 第5次調査B区全体図(1/80)



第7図 第5次調査A区東壁・南壁土層、B区西壁・北壁土層図 (1/50)



第8図 第5次調査C・D区全体図 (1/30)

2. 遺物 (第9図、第1表)

出土遺物には、須恵器、灰釉系陶器、磁器、土師器があり、遺物用コンテナ (60×40×20cm) に1/4程度となる。

A区 SK01 (1)

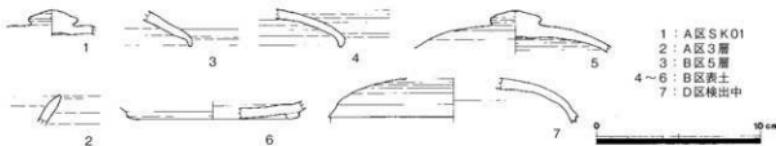
1は壊蓋で、回転ナデにより整形されている。摘み部分に指ナデが施され、内面に指圧痕が見られる。

9世紀のものであろう。

包含層・表土（2～7）

2はA区3層、3はB区5層、4～6はB区表土、7はD区より出土している。

2は坏身の口縁部で、回転ナデにより整形されている。3～5・7は坏蓋で、回転ナデにより整形され、3・5・7の外面にヘラケズリ、5の摘み部分に指ナデが施されている。6は有台环で、回転ナデにより整形され、付高台である。外面にヘラケズリ、指ナデが施されている。2・4が8世紀、3・5・6が9世紀、7が6世紀のものであろう。



第9図 第5次調査出土遺物実測図（1/3）

第1表 第5次調査出土遺物観察表

遺物 番号	地区	遺構	分類	器種	法量 (cm)				地 質	燒成	色 調	調査等	時期	備 考
					LH径	器底	底径	その他						
1	A	SK01	頭部器	坏蓋	(15.5)			20	素	良好	黄褐色	内外面回転ナデ、内面側圧痕	9C	
2	A	3層	頭部器	坏身	(1.8)			10	素	良好	黄褐色	内外面回転ナデ	8C	
3	B	5層	頭部器	坏蓋	(2.2)			10	素	良好	黄褐色	内外面回転ナデ、外面ヘラ削り	9C	
4	B	表土	頭部器	坏蓋	(2.3)			20	素	良好	黄褐色	内外面回転ナデ、外面ヘラ削り	8C	
5	B	表土	頭部器	坏蓋	(2.6)			70	素	良好	黄褐色	内外面回転ナデ、外面ヘラ削り	9C	
6	B	表土	頭部器	有台環	(1.1)	9.6		30	素	良好	黄褐色	内外面回転ナデ、外面側圧痕	9C	
7	D	1	頭部器	坏蓋	(2.8)			30	素	良好	黄褐色	内外面回転ナデ、外面ヘラ削り	6C	

単位はcmまたはg、()は残存部

第4章 第6次調査

1. 遺構 (第10~12図)

第6次調査区は、二連木城の中心部分（現在の大口公園付近）から南東へ150m程離れた位置にある。調査区の形状が東西約24m×南北約27mの範囲で幅6~7mのL字状となるため、地区名はやや変則的ではあるが10mグリッドで南から北に向かってA~E区とした。基本層序は、造成土及び表土等が30~40cm程堆積し、その下が黄褐色砂質土層を基本とする地山となる。この地山上面が遺構検出面で、標高19.1~19.2m程を測り比較的平坦となる。検出遺構には、溝（SD）、井戸（SE）、土坑（SK）があるが、D~E区では一部に攪乱・削平を受けているものの全体的に遺構は希薄となる。

以下、遺物が出土している遺構を中心に説明していく。

SD-1 A区で検出され、東西方向（N-65°-W）に直線的に延び、SD-2を切る。規模は、幅0.7m程、長さ6.7mを測る。溝の断面は浅いU字状で、深さは13cm程。東端と西端との高低差はほとんどない。埋土は茶褐色砂質土。出土遺物には、陶器碗・皿、磁器皿、灰釉系陶器碗等の小片があり、遺構は16世紀代のものであろう。

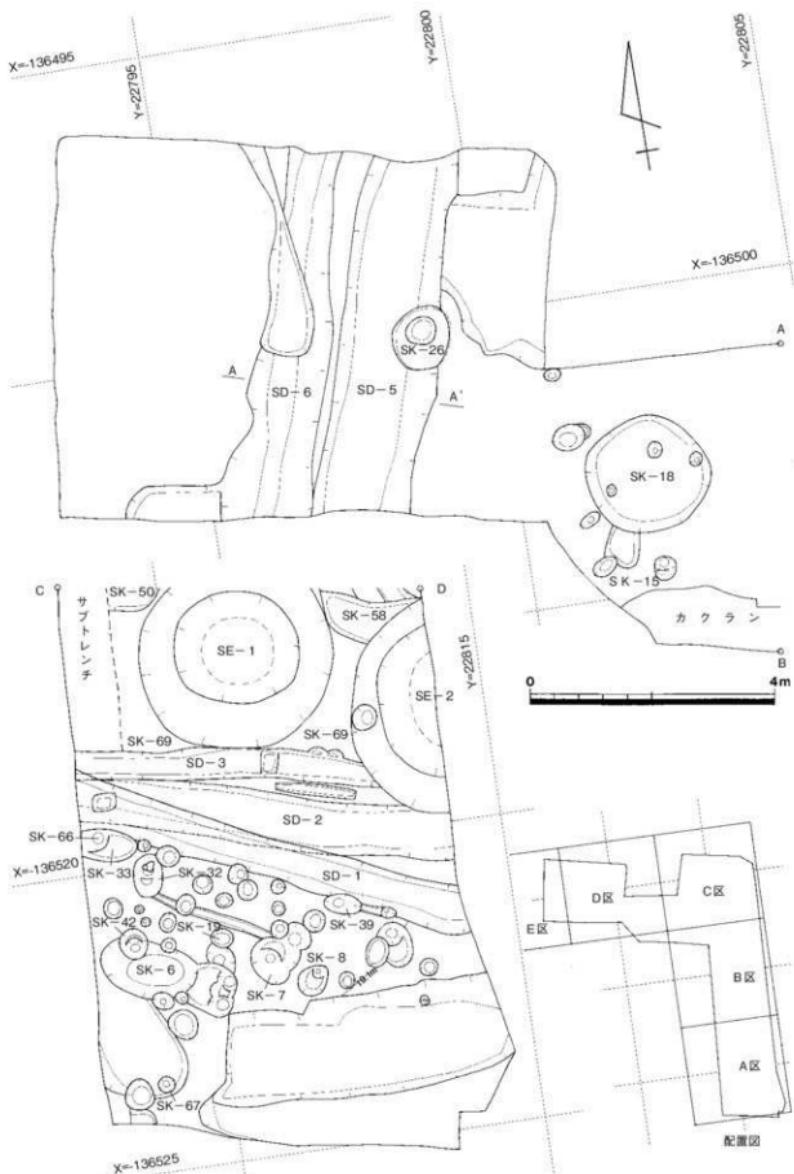
SD-2 A区で検出され、東西方向（N-73°-W）に直線的に延び、SD-1やSD-3に切られる。規模は、幅0.8m程、長さ6.2mを測る。溝の断面は浅いU字状で、深さは30~40cm程。東端と西端との高低差は9cm程で、西から東に向かって低くなる。埋土は灰茶褐色砂質土。出土遺物には、灰釉系陶器甕、土師器鍋、陶器皿等（第13図1）があり、遺構は16世紀代であろう。

SD-3 A区で検出され、東西方向（N-80°-W）に直線的に延び、SD-1に切られSD-2を切る。規模は、幅0.5m程、長さ4.8mを測る。溝の断面は浅い皿状で、深さは10cm程。東端と西端との高低差は10cm程で、西から東に向かって低くなる。埋土は灰茶褐色砂質土。出土遺物には、灰釉系陶器小皿・甕、陶器碗、土師器鍋等の小片があり、遺構は16世紀代であろう。

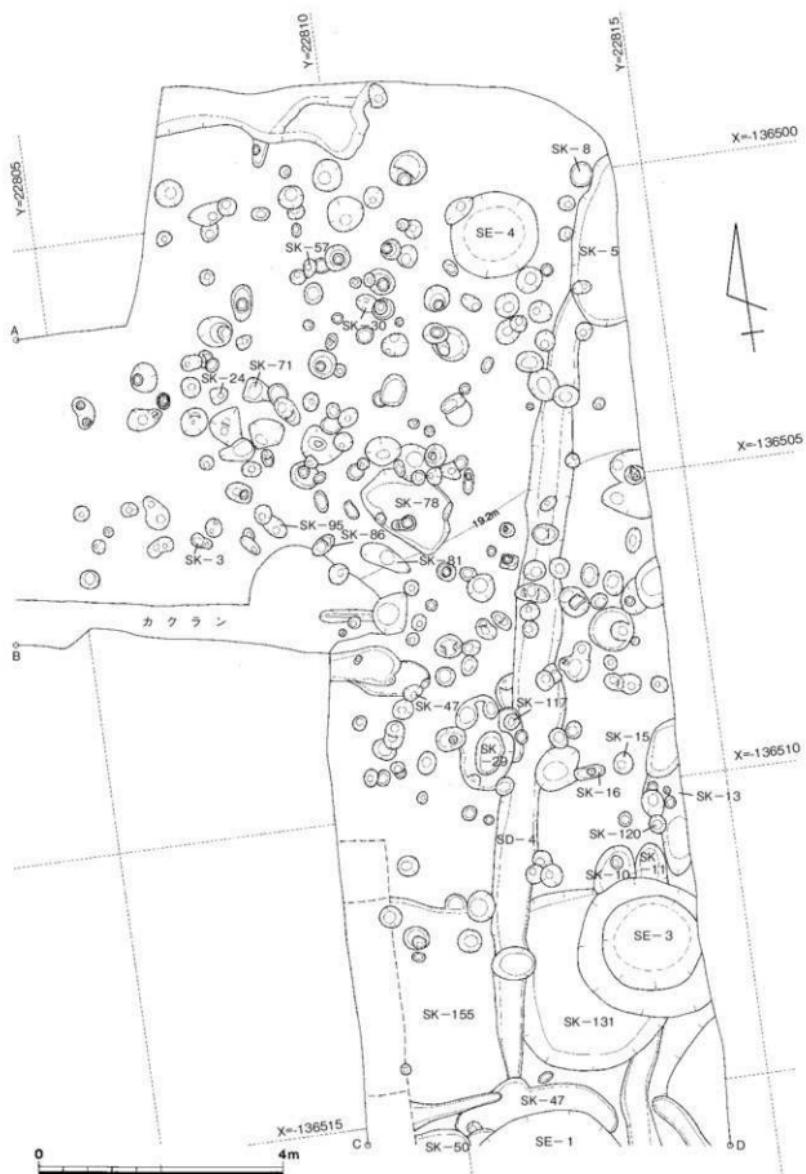
SD-4 B区からC区で検出され、南北方向（N-13°-E）に直線的に延び、複数の土坑と重複している。規模は、幅0.4~0.7m程、長さ12.8mを測る。溝の断面は浅い皿状で、深さは8~14cm程。南端と北端との高低差は24cm程で、北から南に向かって低くなる。埋土は暗茶褐色砂質土。出土遺物には、灰釉系陶器碗・小皿、陶器皿、土師器鍋等の小片があり、遺構は16世紀代であろう。

SD-5 D区で検出され、南北方向（N-18°-E）に直線的に延び、D区SK-26に切られる。規模は、幅1.5m程、長さ5.8mを測る。溝の断面は箱堀状で、深さは70cm程。南端と北端との高低差は5cm程で、南から北に向かって低くなる。埋土は暗灰褐色砂質土。出土遺物には、陶器碗・皿・擂鉢、土師器皿・鍋等（第13図2~12）があり、遺構は16世紀後半~17世紀のものであろう。

SD-6 D区で検出され、南北方向（N-16°-E）に直線的に延び、SD-5とほぼ並行する。規模は、幅0.8~1.5m程、長さ6.0mを測る。溝の断面はU字状で、深さは68cm程。南端と北端との高低差は12cm程で、南から北に向かって低くなる。埋土は茶褐色砂質土。遺物が出土していないがSD-5とほぼ並行していることから、遺構の時期はこれに近いものと推測される。



第10図 第6次調査区全体図-1 (1/80)



第11図 第6次調査区全体図-2 (1/80)

S E - 1 A区で検出された素掘りの井戸で、S D - 3を切る。また、A区SK - 47・50・69など複数の土坑と重複する。上場は径3.8m程で、漏斗状に窄まり、深さ1.5m程まで掘り下げた部分では径1.2m程となる。未完掘。埋土は暗茶褐色砂質土。出土遺物には、陶器碗・鉢・甕、土師器鍋、灰釉系陶器碗等（第13図13～26）があり、遺構は17世紀後半～18世紀前半のものであろう。

S E - 2 A区で検出された素掘りの井戸で、S D - 3を切る。半分以上が調査区外となり全体形ははっきりしないが、S E - 1に類似したものと推測される。上場は径3.5m程と推測され、漏斗状に窄まる。未完掘。埋土は黒褐色砂質土。出土遺物には、灰釉系陶器碗・小皿、土師器小皿・鍋、陶器皿、磁器、磁石等（第13図27～33）があり、遺構は16世紀後半のものであろう。

S E - 3 B区で検出された素掘りの井戸で、B区SK - 10・11・131など複数の土坑と重複する。上場は径2.3m程で、漏斗状に窄まり、深さ1.2m程まで掘り下げた部分では径1.6m程となる。未完掘。埋土は暗茶褐色砂質土。出土した遺物には、陶器碗・皿・擂鉢・甕、土師器小皿、灰釉系陶器碗、磁器等（第14図34～42）があり、遺構は18世紀代のものであろう。

S E - 4 C区で検出された素掘りの井戸で、上場は径1.4m程で、深さ1.0m程まで掘り下げた部分では径0.9m程となる。未完掘。埋土は暗灰褐色粘質土。出土遺物には、陶器碗・擂鉢・磁器碗、土師器小皿・鍋、瓦等（第14図43～52）があり、遺構は19世紀前半のものであろう。

A区SK - 6 平面形は楕円形で、規模は長径1.6m×短径0.9m、深さ39cm程。埋土は暗茶褐色砂質土。土坑の底面は火を受けて赤変し、そのすぐ上からは土器や10～20cm大の石材が出土している。また、柱穴状の土坑A区SK - 42（径0.5m、深さ50cm）と重複し、遺物が接合するものもある。出土遺物には、灰釉系陶器碗・小皿・甕、土師器鍋、磁器等（第14図53～61）があり、遺構の時期は13世紀中葉であろう。また、重複したA区SK - 42も同時期のものであろう。

A区SK - 7 平面形はやや不整な円形で、規模は径0.8m、深さ49cm程。埋土は暗茶褐色砂質土。出土遺物には、灰釉系陶器碗・小皿・壺・甕、磁器、石製品、土師器片等（第15図62～69）があり、遺構は13世紀中葉であろう。

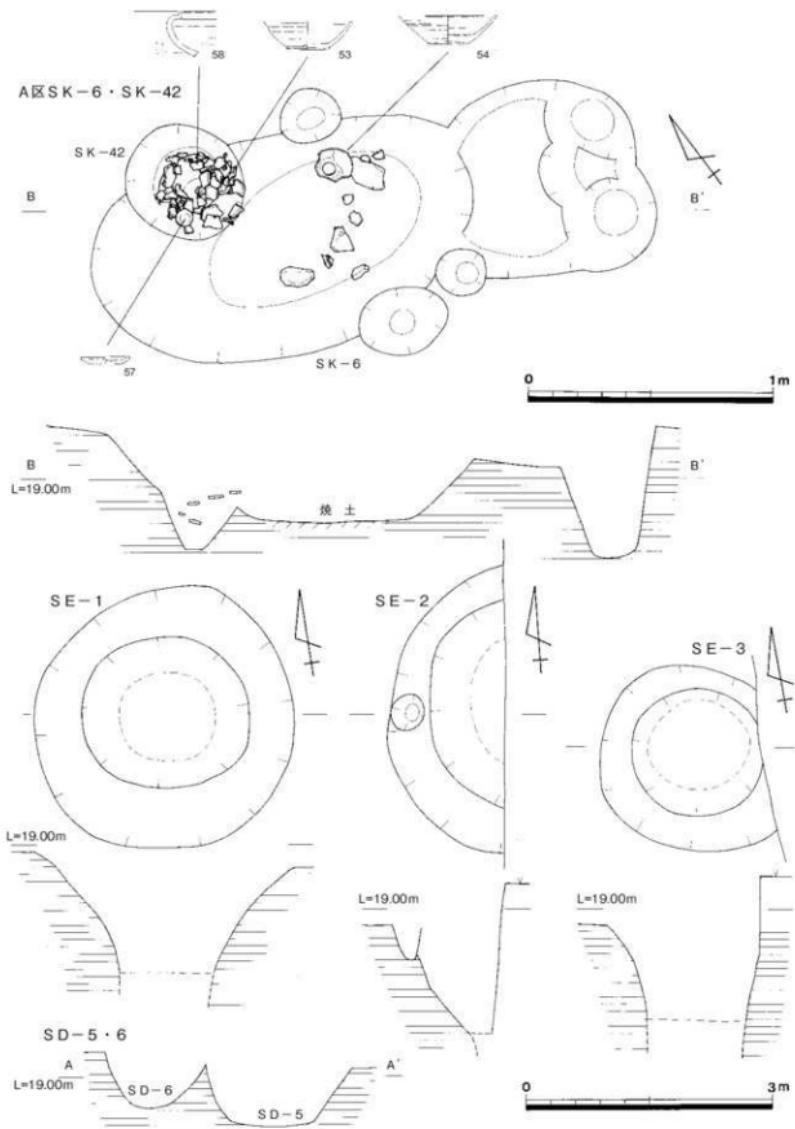
A区SK - 8 平面形はやや不整な円形で、規模は径0.5m、深さ14cm程で、一段低くなる部分は深さ26cm。埋土は暗茶褐色砂質土。出土遺物には、灰釉系陶器碗や土師器片等（第15図70）があり、遺構は13世紀後半のものであろう。

A区SK - 32 平面形は楕円形で、規模は長径0.7m×短径0.5m、深さ22cm程で、一段低くなる部分は根石状の石材が入り深さ41cmを測る。埋土は暗茶褐色砂質土。出土した遺物には、灰釉系陶器碗・小皿（第15図73～75）があり、遺構は13世紀後半～14世紀であろう。

A区SK - 33 平面形は楕円形で、規模は長径0.9m以上×短径0.5m、深さ14cm程で、底面は比較的平坦となる。なお、一段低くなる部分は別の土坑（SK - 66）が重複。埋土は暗茶褐色砂質土。出土遺物には、灰釉系陶器碗、土師器鍋等（第15図76～85）があり、遺構は13世紀中葉であろう。

A区SK - 39 平面形は楕円形で、規模は長径0.6m×短径0.3m、深さ38cm程。埋土は暗茶褐色砂質土。出土遺物には、灰釉系陶器碗・小皿、土師器鍋、磁器等（第15図86・87）があり、遺構は13世紀後半であろう。

A区SK - 47 S E - 1に沿うように検出されているが平面形ははっきりしない。規模は長さ2.6



第12図 第6次調査遺構実測図 (1/20・1/60)

m程×幅0.4m以上、深さ4cm程で、底面は比較的平坦となる。埋土は茶褐色砂質土。出土遺物には、陶器碗・皿（第15図88）があり、遺構は16世紀代であろう。

A区SK-50 平面形は長楕円形と考えられるが、サブトレンドチ等のためはっきりしない。規模は長径0.9m以上×短径0.7m、深さ7cm程で、底面は比較的平坦となる。埋土は黄褐色砂礫土。出土遺物には、灰釉系陶器甕と陶器皿（第15図89）があり、遺構は16世紀代であろう。

A区SK-58 SE-1とSE-2に挟まれ平面形ははっきりしない。規模は長さ1.6m以上×幅0.7m、深さ9cm程で、底面は比較的平坦となる。埋土は暗茶褐色砂礫土。出土遺物には、灰釉系陶器甕、土師器小皿・鍋、石塔等（第15図90～92）があり、遺構は16世紀代であろう。

A区SK-67 柱穴状の土坑で、規模は径0.3m、深さ41cm程。埋土は暗茶褐色砂質土。出土遺物には、灰釉系陶器鉢（第15図93）があり、遺構は13世紀代であろう。

A区SK-69 SD-3からSE-1周間に広がり全体的に5～10cm程低くなった部分で、底面は比較的平坦となるが形状や規模ははっきりしない。埋土は暗茶褐色砂質土。出土遺物には、陶器碗、磁器碗、土師器鍋等（第15図94～100）があり、遺構は16世紀代であろう。

B区SK-3 平面形は不整な楕円形で、規模は長径0.4m×短径0.2m、深さ7cm程で、一段低くなる部分は深さ11cm。埋土は暗茶褐色砂質土。出土遺物には、灰釉系陶器水瓶（第15図101）があり、遺構は12～13世紀であろう。

B区SK-10 平面形は長楕円形と考えられるが、SE-1に切られはっきりしない。規模は長径0.9m以上×短径0.7m、深さ26cm程で、一段低くなる部分は深さ29cm。埋土は黒褐色砂質土。出土遺物には、灰釉系陶器碗・小皿、焼土等（第15図102）があり、遺構は13世紀後半であろう。

B区SK-11 平面形は長楕円形と考えられるが、SE-1に切られはっきりしない。規模は長径0.7m以上×短径0.5m、深さ24cm程。埋土は黒褐色砂質土。出土遺物には、灰釉系陶器碗、土師器鍋等（第15図103）があり、遺構は13世紀前半であろう。

B区SK-13 平面形は不整な楕円形と考えられるが、他の土坑と重複しておりはっきりしない。規模は長径1.8m以上×短径0.7m以上、深さ17cm程で、一段低くなる部分は深さ35cm。埋土は、黒褐色砂質土に黄褐色砂礫土が混ざる。出土遺物には、灰釉系陶器碗・小皿、土師器鍋等（第15図104・105）があり、遺構は13世紀代であろう。

B区SK-15 柱穴状の土坑で、規模は径0.3m、深さ33cm程。埋土は黒褐色砂質土。出土遺物には、灰釉系陶器片、土師器鍋等（第15図106）があり、遺構は16世紀代であろう。

B区SK-16 平面形は楕円形で、規模は長径0.5m×短径0.2m、深さ8cm程で、一段低くなる部分は深さ28cm。埋土は黒褐色砂質土。出土遺物には、灰釉系陶器小皿、土師器小皿等（第15図107）があり、遺構は13～14世紀であろう。

B区SK-29 平面形は不整な楕円形で、規模は長径1.5m×短径0.8m、深さ12cm程で、一段低くなる部分は深さ20cm程を測り、底面はいずれも平坦となる。埋土は暗茶褐色砂質土。出土遺物には、須恵器片、灰釉系陶器碗、陶器碗・鉢等（第16図108～111）があり、遺構は18世紀代であろう。

B区SK-47 柱穴状の土坑で、規模は径0.3m、深さ14cm程。埋土は暗茶褐色砂質土。出土遺物には、須恵器环身・甕等（第16図112）があり、遺構は7世紀代であろう。

B区SK-78 平面形は不整な長方形で、規模は長辺1.6m×短辺1.1m、深さ19cm程で、底面は比較的平坦となる。埋土は暗灰褐色砂質土。出土遺物には、須恵器高环・环蓋、土師器片等（第16図113・114）があり、遺構は7世紀代であろう。

B区SK-81 平面形は不整な梢円形で、規模は長径0.9m×短径0.4m、深さ42cm程。埋土は暗灰褐色砂質土。出土遺物には、灰釉系陶器碗・小皿、土師器片等（第16図115～118）があり、遺構は13世紀代であろう。

B区SK-86 平面形は梢円形で、規模は長径0.5m×短径0.3m、深さ28cm程で、一段低くなる部分は深さ36cm程。埋土は黒褐色砂質土。出土遺物には、灰釉系陶器碗・甕、土師器片等（第16図119・120）があり、遺構は13世紀代であろう。

B区SK-95 柱穴状の土坑で、規模は長径0.4m×短径0.3m、深さ44cm程。埋土は暗茶褐色砂質土。出土遺物には、灰釉系陶器碗・小皿等（第16図121）があり、遺構は13世紀後半であろう。

B区SK-117 柱穴状の土坑で、規模は径0.4m、深さ47cm程。埋土は暗茶褐色砂質土。出土遺物には、陶器碗・皿等（第16図122）があり、遺構は18世紀代であろう。

B区SK-125 溝状の土坑で、規模は長さ2.0m以上、幅0.4～0.5m程、深さ6cm程。埋土は暗茶褐色砂質土。出土遺物には、陶器碗・鉢、土師器片等（第16図124・125）があり、遺構は18世紀前半であろう。

B区SK-155 平面形は不整な長方形と考えられるがはっきりしない。規模は長辺3.3m以上×短辺1.6m以上、深さ18cm程で、底面は比較的平坦となる。埋土は暗茶褐色砂質土。出土遺物には、陶器碗・皿、土師器小皿・鍋等（第16図126～133）があり、遺構は17世紀代であろう。

C区SK-5 平面形は梢円形と考えら、S D-4を切る。規模は長径2.7m以上×短径0.8m以上、深さ13cm程で、底面は比較的平坦となる。埋土は暗茶褐色砂質土。出土遺物には、土師器鍋や混入と考えられる灰釉系陶器碗・小皿（第16図134）があり、遺構は16世紀代であろう。

C区SK-8 平面形は円形で、規模は径0.4m、深さ3cm程。埋土は暗茶褐色砂質土。出土遺物には、灰釉系陶器碗（第16図135）があり、遺構は13世紀前半であろう。

C区SK-30 柱穴状の土坑で、規模は径0.3m、深さ26cm程。埋土は茶褐色砂質土。出土遺物には、須恵器壺や土師器片等（第16図136）があり、遺構は古墳時代後期であろう。

C区SK-71 柱穴状の土坑で、規模は径0.4m、深さ48cm程。埋土は暗茶褐色砂質土。出土遺物には、灰釉系陶器片、土師器小皿等（第16図138）があり、遺構は13世紀代であろう。

D区SK-15 平面形は梢円形で、規模は長径0.5m×短径0.3m、深さ13cm程。埋土は暗茶褐色砂質土。出土遺物には、灰釉系陶器碗（第16図139）があり、遺構は13世紀後半であろう。

D区SK-18 平面形は円形で、規模は径2.0m、深さ13cm程で、底面は比較的平坦となる。埋土は暗茶褐色砂質土。出土遺物には、灰釉系陶器碗・小皿等（第16図140）があり、遺構は13世紀後半であろう。

D区SK-26 平面形は不整な円形で、規模は径1.0m程、深さ84cm程で底面は平坦となり、一段低くなる部分は深さ114cm程を測る。埋土は暗茶褐色砂質土。出土遺物には、陶器鉢・擂鉢、土師器小皿・鍋等（第16図141～145）があり、遺構は18世紀代であろう。

2. 遺物 (第13~16図、第2表)

出土した遺物には、須恵器、灰釉系陶器、陶器、磁器、土師器などがあり、遺物用コンテナ (60×40×20cm) に7箱分となる。

S D - 2 (1) 1は土師器半球形鍋で、口縁部は垂直気味に伸び、端部は平坦な面となる。口縁端部ヨコナデ、内面ナデ・指オサエ、外面ナデ。16世紀代のものと考えられる。

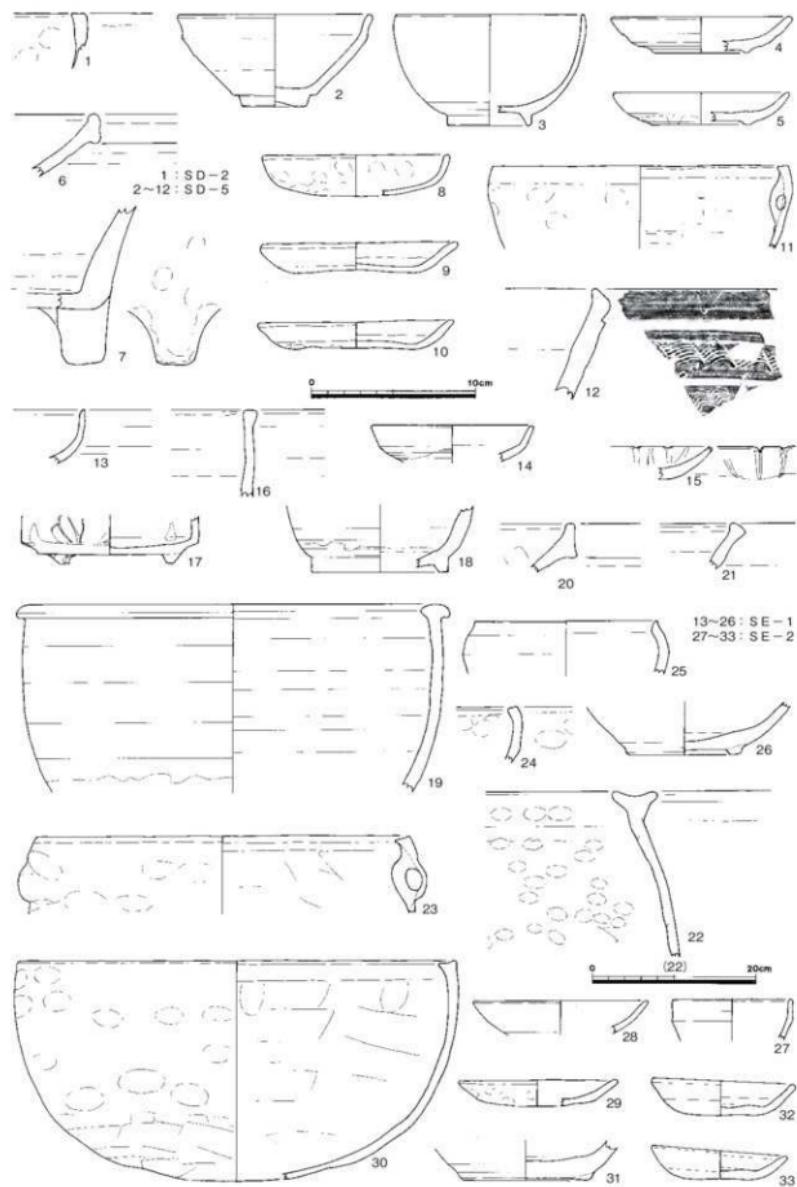
S D - 5 (2~12) 2~7は陶器。2は天目茶碗で、口縁部は外上方に伸び、端部を緩やかに屈曲させる。高台部は削り出し。3は丸碗で、口縁部は内湾気味に伸び、端部は丸く収める。4は丸皿、5は内禿皿で、いずれも口縁部は緩やかに立ち上がる。6は擂鉢で、口縁部は外上方に伸び端部は上下に肥厚する。7は火鉢の脚部で、ナデ整形。これらは、16世紀後半~17世紀のものと考えられる(注1)。8~11は土師器。8は小皿で、口縁部は内湾気味に比較的高く立ち上がる。9・10は皿で、口縁部は強いヨコナデにより外上方へ伸びる。11は半球形鍋で、口縁部は内湾気味に伸び、端部は内傾面となる。これら土師器は、陶器に伴う時期のものであろう。12は須恵器甕で、口縁部は直線的に伸び、端部は外傾した面となる。外面に沈線や波状文が施される。古墳時代後期のものであろう。

S E - 1 (13~26) 13~22は陶器。13は小碗で、口縁部は内湾気味となる。14は腰折碗で、口縁部は屈折して立ち上がる。15は菊皿で、口縁部は緩やかに立ち上がる。16は片口で、口縁部は垂直に伸び端部は面となる。17は香炉で、底部は平坦で口縁部は垂直気味となる。18は鉢で、高台部は削り出し。19は練鉢で、口縁部は垂直気味に伸び端部は内外に肥厚する。20・21は擂鉢で、口縁部は外上方へ伸び端部を肥厚し面となる。22は常滑窯産の甕(赤物)で、口縁部はY字状となる。これらは、17世紀後半~18世紀前半のものと考えられる。23・24は土師器半球形鍋で、体部はいずれもやや偏平で、口縁部は内湾気味に伸び、端部は内傾面となる。これらは、陶器に伴う時期のものであろう。25・26は灰釉系陶器。25は片口碗で、口縁部は内湾し端部は内傾面となる。26は碗で、高台部は低く偏平となる。底部外面に墨書きあり。これらは、12世紀後半~13世紀代のものであろう。

S E - 2 (27~33) 27は陶器小碗で、口縁部は屈折して立ち上がる。28は陶器丸皿で、口縁部は緩やかに伸びる。これらは、16世紀後半のものと考えられる。29・30は土師器。29は小皿で、口縁部は緩やかに立ち上がる。30は半球形鍋で、口縁端部はやや肥厚し内傾面となる。これらは、陶器に伴う時期のものであろう。31~33は灰釉系陶器。31は碗で、高台部は低く偏平となる。32・33は小皿で、底部は広く平坦で口縁部は緩やかに立ち上がる。これらは、13世紀中葉のものであろう。

S E - 3 (34~42) 34~40は陶器。34・35は丸碗で、口縁部は内湾気味に伸び端部は丸く収める。36は輪禿皿で、口縁部は緩やかに立ち上がる。37は鬢盤で、口縁部はやや内傾気味で端部は丸く収める。38・39は擂鉢で、口縁部は外上方へ直線的に伸び、端部を肥厚したり屈曲して丸く収める。40は鳥形の水滴で、背中部分と嘴部分に円孔を穿つ。これらは、18世紀代のものと考えられる。41は土師器小皿で、口縁部は緩やかに立ち上がる。42は半球形鍋で、体部はやや偏平と推測され口縁端部は平坦面となる。これらは、陶器に伴う時期のものであろう。

S E - 4 (43~52) 43~47は陶器。43・44は小碗で、口縁部は内湾気味となる。45は徳利で、体部はやや肩が張り口縁部は直線的となる。46は練鉢で、口縁部は垂直気味で端部は外方に小さく折



第13図 第6次調査出土遺物実測図-1 (1/3・1/6)

り返す。47は擂鉢で、口縁部は外上方へ直線的に伸びる。48・49は磁器。48は広東碗で、口縁部は外上方へ伸び端部は丸く収める。49は筒形湯呑で口縁部は垂直気味となる。これらは、19世紀前半のものと考えられる。50・51は土師器。50は小皿で、口縁部は小さく立ち上がる。51は焰焰で、口縁部は端部近くで屈曲し、端部は内傾面となる。耳部が3ヶ所以上確認できる。52は軒平瓦で、瓦当には複線の唐草文。これらは、陶器・磁器に伴う時期のものであろう。

A区SK-6・A区SK-42 (53~61) 53~58は灰釉系陶器。53・54は碗で、口縁部は外上方へ伸び、53の端部は僅かに外反させる。高台部はいずれも低く、接地面には砂粒痕。55~57は小皿で、底部は広く口縁部の立ち上がりは低い。底部外面糸切り。58は常滑窯産の甕で、口縁部は大きく外反し、端部は受け口状で面となる。これらは、13世紀中葉のものであろう。59・60は青磁碗で、60には蓮弁文。61は土師器鍋で、いわゆる伊勢型鍋。口縁部は大きく外反し、端部は内傾気味に立ち上がる。口縁端部ヨコナデ。これらは、灰釉系陶器に伴う時期のものであろう。

A区SK-7 (62~69) 62~66は灰釉系陶器。62は碗で、口縁部は直線的に外上方へ伸びる。高台部に初穀痕。63・64は小皿で、底部は平坦で口縁部は小さく立ち上がる。65は壺で、肩部はなで肩となる。体部外面下半は、ヘラケズリ後回転ナデによる調整。66は甕で、口縁部は短く大きく外反する。これらは、13世紀中葉のものであろう。67は青磁碗で、口縁部は内湾気味に伸びる。68は白磁四耳壺と考えられ、肩部あたりに耳部が僅かに残る。これらは、灰釉系陶器に伴う時期のものであろう。69は石皿と考えられ、平面の中央がやや窟む。混入品であろう。

A区SK-8 (70) 70は灰釉系陶器碗で、口縁部は外反気味に伸び、端部は丸く収める。13世紀後半のものであろう。

A区SK-19 (71・72) 71・72は灰釉系陶器。71は碗で、高台はやや高く初穀痕が見られる。72は小皿で、口縁部は低く立ち上がり偏平となる。これらは、13世紀後半のものであろう。

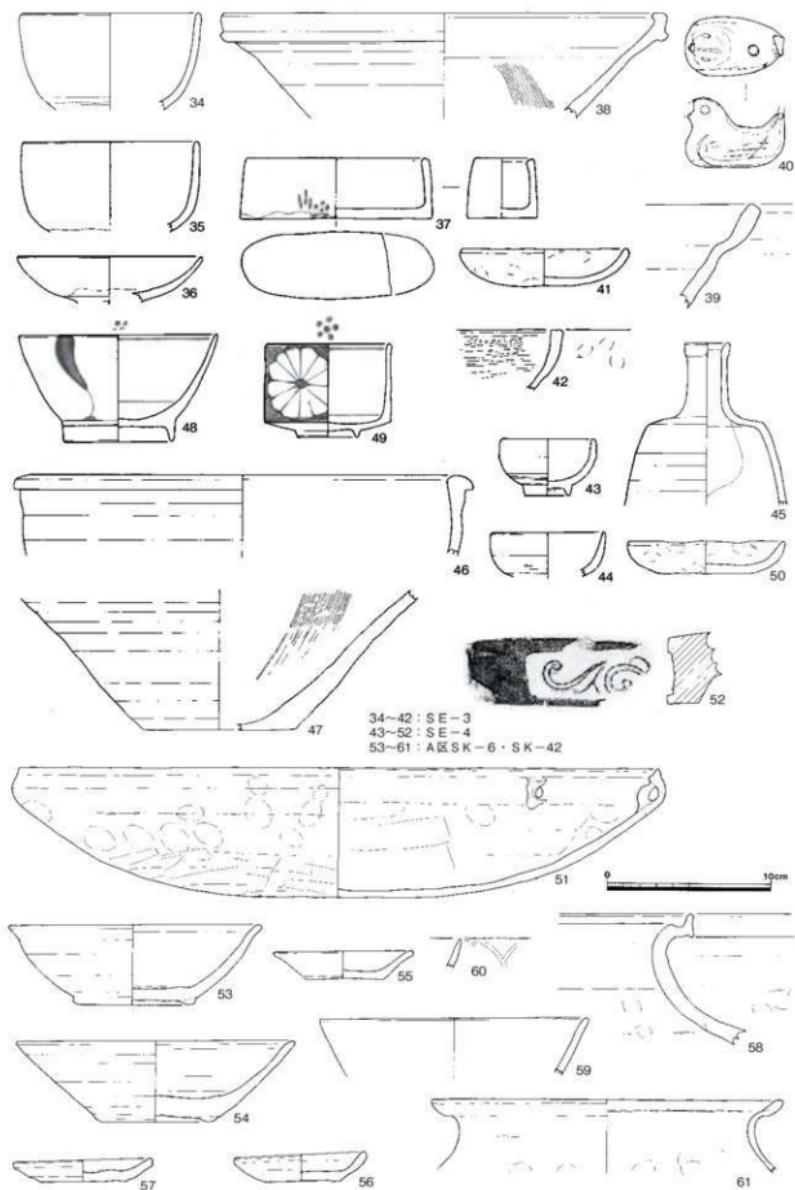
A区SK-32 (73~75) 73・74は灰釉系陶器。73は碗で、口縁端部は外反気味となる。74は小皿で、口縁部は小さく立ち上がる。75は土師器小皿で、口縁部は緩やかに低く立ち上がる。内外面ナデ、指オサエによる調整。これらは、13世紀後半~14世紀代のものであろう。

A区SK-33 (・A区SK-66) (76~85) 76~82は灰釉系陶器。76~78は碗で、口縁端部は外反気味となり、高台部はやや低く偏平となる。79~82は小皿で、底部が明瞭なもの(79・80)もあるが全体的には広く不明瞭で、口縁部の立ち上がりは低い。これらは、13世紀中葉のものであろう。83~85は土師器。83・84は碗で、底部は平坦で口縁部が緩やかに立ち上がる。83はやや厚手で、調整は摩滅が著しいが回転ナデか。84は、口縁部ヨコナデによる調整。85は伊勢型鍋で、口縁端部は内傾気味に立ち上がる。これらは、灰釉系陶器に伴う時期のものであろう。

A区SK-39 (86・87) 86は灰釉系陶器小皿で、底部は広く口縁部の立ち上がりは小さい。13世紀後半のものであろう。87は白磁壺の体部片と考えられ、体部外面は回転ヘラケズリ。

A区SK-47 (88) 88は陶器皿で、高台部は削り出し。大窯製品で、16世紀のものであろう。

A区SK-50 (89) 89は陶器丸皿で、口縁部は外上方へ伸び端部は丸く収める。内外面に灰釉。16世紀のものであろう。



第14図 第6次調査出土遺物実測図-2 (1/3)

A区SK-58 (90~92) 90・91は土師器。90は小皿で、口縁部は緩やかに立ち上がる。91は半球形鍋で、口縁部は垂直気味に伸び端部は面となる。これらは、16世紀代のものであろう。92は宝篋印塔の相輪（九輪）部分と考えられる。上部は欠損。花崗岩製。

A区SK-67 (93) 93は灰釉系陶器片口鉢で、高台部はやや低く接地面には砂粒痕。底部外面下半はヘラケズリ。13世紀代のものであろう。

A区SK-69 (94~100) 94・95は陶器。94は小碗で、口縁部は内湾気味に立ち上がる。95は天目茶碗で、高台部は削り出し、露台。これらは、16世紀代のものであろう。96は青磁碗で、外面に蓮弁文。97は青磁折縁皿で、外面に施文（蓮弁文？）。98・99は土師器半球鍋で、98は口縁部を屈曲させ端部は面となる。外面に沈線を巡らす。これら土師器は、16世紀代のものであろう。100は灰釉系陶器壺で、口縁部は短く外反気味に伸びる。混入品。

B区SK-3 (101) 101は灰釉系陶器水瓶で、渥美窯産。体部は肩が張り、この部分に突帯を巡らす。頸部は屈曲し、この部分にも低い突帯が巡る。内外面の調整は、丁寧な回転ナデ。普門寺旧境内での採取品に類例があるが、出土例は少ない。12~13世紀のものであろう。

B区SK-10 (102) 102は灰釉系陶器小皿で、底部はやや広く口縁部は外方へ伸びる。13世紀後半のものであろう。

B区SK-11 (103) 103は灰釉系陶器碗で、口縁部は内湾気味で端部は外反する。13世紀前半。

B区SK-13 (104・105) 104・105は灰釉系陶器。104は碗で、高台部はやや低く接地面には粗粒痕。105は小皿で、底部は明瞭となる。これらは、13世紀代のものであろう。

B区SK-15 (106) 106は土師器羽付鍋で、体部外面に幅の狭い鈎を巡らす。鈎部はヨコナデ調整。16世紀のものであろう。

B区SK-16 (107) 107は土師器小皿で、口縁部は小さく立ち上がり端部は内傾した面となる。13~14世紀のものであろう。

B区SK-29 (108~111) 108~110は陶器。108は碗で、口縁部は内湾気味となる。高台部削り出し。109・110は火鉢で、口縁部は外上方へ直線的に伸びる。いずれも内面に煤付着。これら陶器は、18世紀のものであろう。111は須恵器坏身で、8世紀代のものであろう。

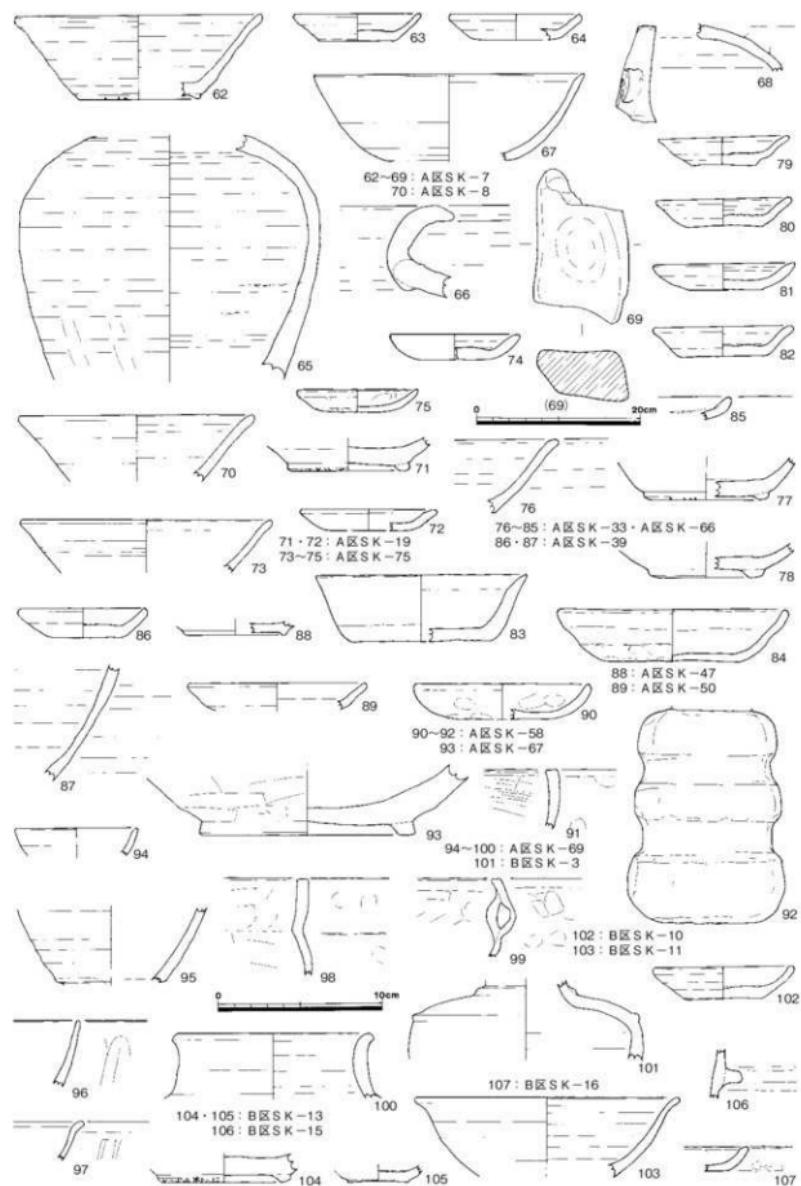
B区SK-47 (112) 112は須恵器坏身で、口縁部は短く内傾し端部は丸く収める。内外面回転ナデ。古墳時代後期（7世紀）のものであろう。

B区SK-78 (113・114) 113・114は須恵器。113は無蓋高坏で、口縁部は外上方に伸びる。114は坏蓋で、天井部外面回転ヘラケズリ。古墳時代後期（7世紀）のものであろう。

B区SK-81 (115~118) 115~118は灰釉系陶器。115・116は碗で、断面三角形（115）や少し丸味を帯びた（116）高台となる。117は片口碗で、口縁部は内湾気味に伸び、端部は内傾した面となる。118は小皿で、底部は広く平坦となる。これらは、13世紀代のものであろう。

B区SK-86 (119・120) 119・120は灰釉系陶器。119は碗で、低い高台となる。120は甕で、底部は平坦で、体部は外上方へ直線的に伸びる。13世紀後半のものであろう。

B区SK-95 (121) 121は灰釉系陶器小皿で、底部はやや広く口縁部は外方へ伸び偏平となる。13世紀後半のものであろう。



第15図 第6次調査出土遺物実測図-3 (1/3 · 1/6)

B区SK-117 (122) 122は陶器皿で、高台部は削り出し。内面に透明釉。18世紀のもの。

B区SK-120 (123) 123は灰釉系陶器小皿で、底部はやや突出する。底部外面系切り。13世紀前半のものであろう。

B区SK-125・B区SK-131 (124・125) 124・125は陶器。124は片口鉢で、口縁部は内湾気味に伸び、端部はやや肥厚して面となる。125は擂鉢の口縁部片で、端部は肥厚している。18世紀前半のものであろう。

B区SK-155 (126~133) 126~131は陶器。126は丸碗、127は天目茶碗で、いずれも内外面に鉄釉。128は輪禿皿、129は皿で、いずれも高台部は削り出し。130は丸皿。131は壺で、高台部は削り出し。これらは、17世紀のものであろう。132・133は土師器。132は小皿で、口縁部は比較的高く立ち上がる。133は半球形鍋で、やや偏平となる。これらは、陶器に伴う時期のものであろう。

C区SK-5 (134) 134は灰釉系陶器小皿で、底部は比較的狭いが口縁部の立ち上がりは低く偏平となる。13世紀後半のものであろう。

C区SK-8 (135) 135は灰釉系陶器碗で、高台部は断面三角形でやや高く接地面には砂粒痕。13世紀前半のものであろう。

C区SK-30 (136) 136は須恵器甕で、口縁部は大きく外反し屈折して立ち上がる。外面には櫛刺突文。古墳時代後期のものであろう。

C区SK-57 (137) 137は灰釉系陶器碗で、高台部は丸味を持つがやや高く接地面には初期痕。13世紀代のものであろう。

C区SK-71 (138) 138は土師器小皿で、口縁部は緩やかに立ち上がり端部は僅かに面となる。13世紀代のものであろう。

D区SK-15 (139) 139は灰釉系陶器碗で、口縁部は外反気味に伸びる。高台部は低く偏平で、初期痕が見られる。13世紀後半のものであろう。

D区SK-18 (140) 140は灰釉系陶器小皿で、底部は平坦で口縁部は小さく立ち上がる。13世紀後半のものであろう。

D区SK-26 (141~145) 141~143は陶器。141は片口鉢で、高台部は削り出し。142は擂鉢で、底部は平坦で口縁部は外上方へ直線的に伸びる。143は火鉢で、底部は広く平坦で口縁部は外反気味となる。内面に煤が付着。これらは、18世紀のものであろう。144・145は土師器。144は小皿で、口縁部は緩やかに立ち上がる。145は焙烙に近い鍋で、口縁部は緩やかに立ち上がり端部を内傾させる。口縁端部ヨコナデ。これらは、陶器に伴う時期のものであろう。

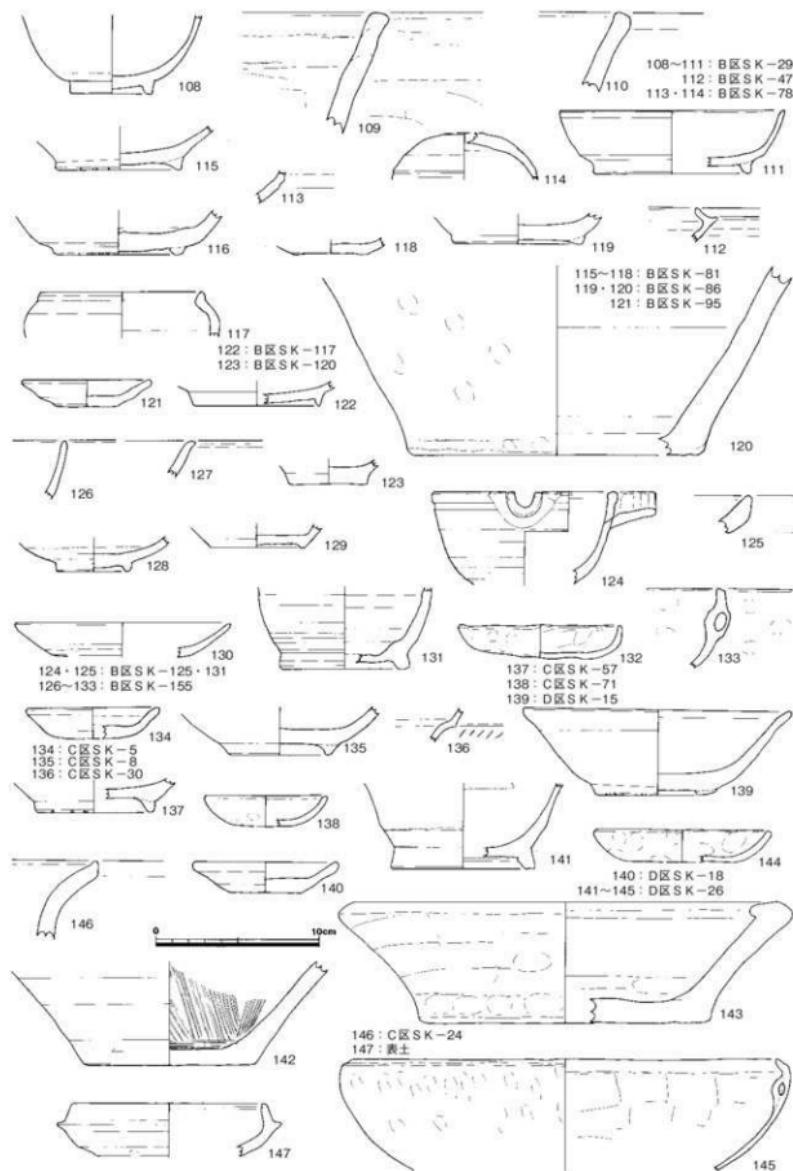
C区SK-24 (146) 146は灰釉系陶器甕で、渥美窯産。口縁部は大きく外反し、端部は外傾面となる。13世紀代のものであろう。

表土 (147) 147は須恵器坏身で、体部はやや偏平で受け部は外方に伸びる。口縁部は短く伸び、端部は僅かに窪む。底部外面回転ヘラケズリ。古墳時代後期（6世紀後半）のものであろう。

注1 灰釉系陶器・古瀬戸などの年代観は、主に藤澤氏の編年に基づく。

・藤澤良祐1997「中世瀬戸窯の動態」『研究紀要 第5輯』財瀬戸市埋蔵文化財センター

・藤澤良祐2002「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『研究紀要 第10輯』財瀬戸市埋蔵文化財センター



第16図 第6次調査出土遺物実測図-4 (1/3)

第5章 総括

1. 第5次調査について

今回の調査では、二連木城が存続したとされる1493～1590年のおよそ16世紀代の遺構・遺物はほとんど確認できず、第4次調査までの状況と一致している。また、小片のため図化しなかったが、13世紀後半～14世紀前半のものと考えられる遺物が出土しており、これも前回までの状況と一致している。そして、隣接する東田遺跡と同様の6世紀の遺物とそれ以降の遺物も見られることから、東田遺跡の広がりが予想されると共に古代にも集落として機能していた可能性があろう。

2. 第6次調査について

第6次調査区は、これまで二連木城周辺の調査の中で調査面積は最も広く、遺構の時期や内容も多岐に渡っていた。確認された遺構・遺物から、次の4期に大きく分けて考えてみたい。

1期（6世紀後半～8世紀前半）

この時期の遺構としては、B区SK-78やC区SK-30などの小規模な土坑が確認されている。同時期の遺構・遺物は第1・2・4・5次調査区でも確認されており、隣接する東田遺跡の集落としての広がりを示すものと考えられる。但し、第2次調査区で確認されている竪穴建物のような存在は無く、遺構密度もまばらであることから、本調査区は東田遺跡における南西の縁辺部であったと推測される。

2期（13世紀代）

この時期は13世紀を中心とするもので、これまでの調査区でも最も多く遺構・遺物が確認されている。本調査区で確認された遺構は、ほとんどが小規模な土坑である。また、柱穴状の遺構も確認できることから、第1・2次調査区で検出されている掘立柱建物と同様な建物の存在も十分に考えられる。

一方で、A区SK-58出土の宝篋印塔の相輪やB区SK-3で出土した灰釉系陶器の水瓶、比較的多く出土している青磁・白磁の輸入磁器の存在から、一般の集落とは異なる性格の遺跡、例えば豪族屋敷地あるいは寺院関連の施設などが予想される。

3期（16世紀代）

この時期はほぼ二連木城が存続した時期であり、本調査区では溝（SD-1～SD-6）や井戸（SE-2）、多くの土坑が確認されている。このうち、SE-2については、比較的規模の大きなものであることから、個人の使用目的というより城内において共用されていたと推測される。

また、検出された溝の中で、規模が大きく断面形状が箱型となるSD-5については、二連木城において曲輪を区切るような堀であった可能性が高く、このSD-5に並行するSD-6についても、規模的には小さいが同様の区画溝としての機能が推測される。なお、SD-5・SD-6の西側にはほとんど遺構は無いことから、この溝に沿って土塁が築かれていた可能性も考えられる。

ちなみに第2図に示した二連木城址の範囲は、絵図や地籍図から求めたものである。また、「愛知

県中世城館跡調査報告Ⅲ』によれば、絵図や地籍図の分析から大口公園付近の曲輪Ⅰを主郭として、そのすぐ東側に曲輪Ⅱが連なり、さらにその東側（老人福祉センター周辺）及び南側（稲荷神社周辺）にも曲輪が存在するとしている。また、『報告Ⅲ』では「稲荷神社境内の祠の基壇」を土壘の残欠と想定しており、この状況を調査結果と照らし合わせてみると、SD-5の位置や方向が「土壘の残欠」と合致する可能性が高い。

今回の調査区は、二連木城主郭の南側に位置する曲輪内あるいはすぐ外側に相当すると考えられ、初めてその内部の状況が推測できる段階になったと言える。

4期（18世紀～19世紀前半）

この時期については、二連木城廃城後の状況を示すものと考えられる。本調査区では、SE-2を除く井戸や比較的大きな土坑D区SK-26等が確認されている。

井戸は、比較的狭い範囲で検出されているが、同一時期のものは無く、二連木城の時期から継続的に掘り直され利用されていた可能性が考えられる。二連木城廃城後も、何らかの形で城が利用されていたことを示すものであろう。

参考文献

愛知県教育委員会 1997 「愛知県中世城館跡調査報告Ⅲ（東三河地区）」

二連木城址 第5・6次発掘調査

写 真 図 版



1. A区全景（北から）



2. B区全景（東から）

写真図版2

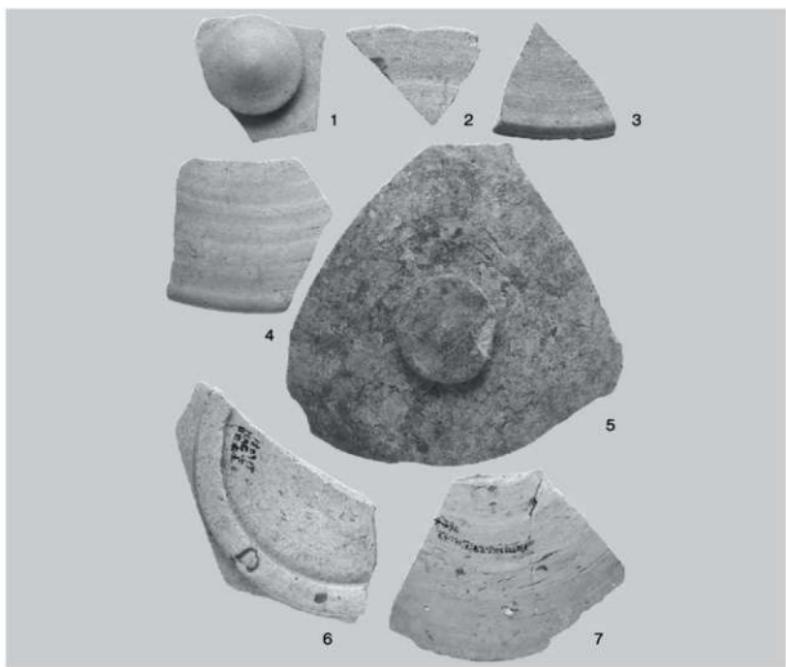
二連木城址第5次



1. C区全景（東から）



2. D区全景（東から）



3. 出土遺物



1. 調査区全景－1（北西から）



2. 調査区全景－2（北から）



1. A～C区付近全景（北西から）



2. D・E区付近全景（北から）



1. D・E区全景（南東から）



2. SD-5・6及び
土層断面（北から）



3. SD-5及び土層断面
(南から)

写真図版6

二連木城址第6次



1. A・B区付近全景
(南西から)



2. A区SE-1 (西から)



3. A区SE-1 土層断面
(北から)



1. B区SE-3（西から）



2. A区SK-6・42遺物
出土状況（南から）



3. A区SK-42遺物出土
状況（南から）

写真図版8

二連木城址第6次



出土遺物

い むら
居 村 遺 跡

第3次発掘調査

例 言

1. 「居村遺跡第3次発掘調査」は、国庫補助を受けて平成25年度に行った調査の報告書である。所在地、調査期間・面積及び担当については下記のとおりである。なお、報告書作成は小林が行ったが、第1章については『豊橋市埋蔵文化財発掘調査報告書第129集 市内遺跡発掘調査—平成23年度一』(2014) の「居村遺跡第1・2次発掘調査」の第1章（岩原剛執筆）を再掲した。

○豊橋市北岩田一丁目8-28 ○平成25年11月1日～11月29日

○350m² ○村上 昇（豊橋市教育委員会教育部美術博物館）

2. 調査にあたり、土地所有者並びに開発事業者にはご協力を頂いた。

目 次

第1章 遺跡の立地と歴史的環境	69
第2章 調査の目的と経過	73
第3章 遺構と遺物	75
第4章 総括	85
写真図版	86

挿図目次

第1図 遺跡周辺の地形 (1/10,000)	69
第2図 周辺の遺跡分布図 (1/25,000)	72
第3図 調査区位置図 (1/2,500)	73
第4図 調査区全体図-1 (1/100)	76
第5図 調査区全体図-2 (1/100)	77
第6図 遺構実測図-1 (1/20・1/40)	79
第7図 遺構実測図-2 (1/40)	80
第8図 出土遺物実測図 (1/3)	83

表 目 次

第1表 出土遺物観察表	84
-------------------	----

写真図版目次

1-1 調査区遠景 (南東から)	87
2-1 S区全景 (垂直)	88
3-1 N-1区SK-33全景 (南から)	89
3 S-2区SK-61S F-4全景 (西から)	89
5 S-2区SK-87全景 (南から)	89
4-1 S-3区SK-101断ち割り状況 (南から)	90
3 出土遺物	90
2 N区全景 (垂直)	88
2 S区西側全景 (西から)	88
2 S-2区SK-61全景 (東から)	89
4 S-2区SK-87遺物出土状況 (東から)	89
5 S-3区SK-49遺物出土状況 (南から)	89
2 S区作業風景 (南東から)	90

第1章 遺跡の立地と歴史的環境

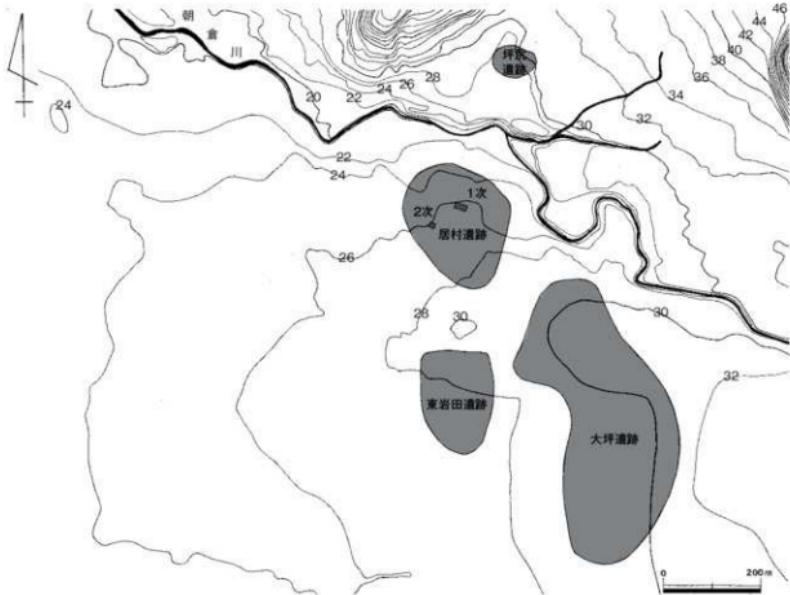
1. 遺跡の立地（第1図）

居村遺跡は豊橋市岩田町に所在する集落跡である。豊橋市は東が弓張山地、南が太平洋、西が三河湾にそれぞれ面し、市域北側は一級河川である豊川が三河湾に向かって西流する。

遺跡は、市東部の静岡県境にほど近いところにある岩崎地区の西端付近に所在する。愛知・静岡両県の境は、市の東部にあって北から南に山稜を連ねる弓張山系によって画されており、弓張山系の主尾根からは西にいくつもの支尾根が派生している。岩崎地区とその北にある多米地区は、南と北側がこの支尾根にはさまれ、最も東にあたる最奥部は主尾根があって、この間の谷とその周辺に展開する地域である。谷の中には朝倉川が貫流し、上流である東側で分岐して北が滝川、南が境川と呼ばれている。

岩崎・多米地区は、河岸段丘とその上に流入した扇状地性の堆植物でおもに構成されており、それを川が深く開析して、巨視的には東から西へと下がる緩やかな下り斜面になっている。弥生時代以降の集落遺跡は、川を臨む段丘の縁辺部や扇状地上の微高地、そして山麓の緩斜面などに存在している。

居村遺跡は、朝倉川の谷底平野を北に臨む段丘端部に位置しており、標高24~28mの北向きに下がるなだらかな斜面に所在している。



第1図 遺跡周辺の地形 (1/10,000)

2. 歴史的環境（第2図）

居村遺跡（1）は、豊橋市東部の岩崎地区に所在する。多米地区を含めて、付近は市内有数の遺跡集中地帯である。ここでは多米・岩崎地区と、そこに隣接する地域に限定して、歴史的環境を説明する。

旧石器時代 牛川洞穴遺跡（2）は、10万年前の新人の化石人骨が出土した洞穴遺跡として知られてきたが、近年は骨の種類について否定的な意見も出されるようになってきた。

縄文時代 多米・岩崎地区ではまだ当該期の集落遺跡は確認されていない。北側の小鷹野地区では、縄文時代早期の押型文土器が出土した上浦遺跡やおいほて遺跡などが知られている。

弥生時代 付近では弥生時代の遺跡は少ない。坪尻遺跡（3）は山麓の緩斜面に立地し、伏流水を利用して水田を經營した集落と推定されるが、詳細はわからない。

古墳時代 多米・岩崎地区に集落遺跡が目立って出現し始める時期である。居村遺跡や、弥生時代から続く坪尻遺跡のほかに、多米西町遺跡、大坪遺跡（4）・多米東町遺跡（5）で古墳時代の遺物が採集されており、集落遺跡と推定されている。しかし発掘調査が行われたところが無いため、詳細は分らない。

一方、多米地区の北側の山中やさらに北の小鷹野地区には、群集墳が多く存在しており、市内でも古墳が集中する地域のひとつである。市街地に隣接するため、近年になって山地の開発が進み、多くの古墳が調査されている。相生塚古墳（9）は平坦な住宅街の中に単独で残された古墳で、本来は舌状に伸びた段丘の端部に立地していた。平成24年に市教育委員会が行った発掘調査で6世紀中葉に築造された直径17mの円墳と判明し、主体部として西に開口する竪穴系横口式石室が検出された。石室は未盗掘で、副葬品がほぼ撲滅を受けることなく出土している。このほか、群集墳には小鷹野地区の大龜古墳群（10）、乗小路古墳群（11）、多米地区的キジ山古墳群（12）、野中古墳群（13）、寺門古墳群（14）、稲荷山古墳群（15）、大岩地区の火打坂古墳群（17）、北山古墳群（18）があり、このうち乗小路古墳群中のB2号墳、キジ山古墳群、稲荷山古墳群が発掘調査されている。乗小路B2号墳は7世紀中葉の円墳で、急斜面に築造されたためか、墳丘内に厳重な埋め殺しの石積みを設けていた。大型の横穴式石室は未盗掘で、豊富な武器類や祭祀に使用された須恵器が出土している。キジ山古墳群では無袖の横穴式石室が複数検出されたほか、稲荷山古墳群では無袖横穴式石室を伴う3基の古墳と右片袖式石室を伴う古墳（1号墳）が確認された。このうち1号墳からは、2点の鉄製轡は豊富な玉類などが出土地おり、小首長墓と目される。一方、岩崎地区に古墳は少ないが、日吉神社古墳（16）は6世紀中～後葉の単独墳で、主体部は右片袖横穴式石室である。

古代 古代になると、多米・岩崎地区での集落遺跡数はさらに増えており、大規模な集落が展開するようになる。この時期の集落遺跡は、後の多米街道沿いに分布が集中しており、この交通路が古代までさかのぼり、国境越えの峠道へと連なる重要なルートであったことを推定させる。また、平城京出土木簡に「多米」を記したものが見られ、平安時代に編纂された『倭名類聚抄』にも「三河国八名郡多米郷」が現れるなど、地域が急速に発展した様子を文献からもたどることができる。なお、多米地区は八名郡だが、岩崎地区は渥美郡に属していた。古代の集落遺跡には東岩田遺跡（6）、坪尻遺跡、大坪遺跡、多米東町遺跡、森中遺跡（7）、道下遺跡（8）などがあり、多くの遺物が採集されている。

しかし発掘調査された遺跡は無い。

灰釉陶器窯 豊橋市東部から南部にかけては、古代から中世の窯址群が展開している。このうち平安時代を中心とする灰釉陶器の窯は「二川窯」と呼ばれ、ここでの製品は東三河地方やその近郊だけでなく、関東地方まで流通した。窯址は多米・岩崎地区まで分布しており、福田1・2号窯（19）、米山古窯址群（20）、高山古窯址群（21）が知られている。福田1・2号窯は、後述する北脇廃寺址の旧境内域に含まれ、そこでの製品は同寺址や稲荷山古墳群などからまとまって出土している。また、高山古窯址群の一部は6基の窯址が集中して分布している。

寺院址 三遠国境の弓張山系には、数多くの山寺跡が存在する。国史跡に指定された湖西市の大知波岬廃寺は著名である。多米・岩崎地区にも数多くの山寺跡が知られ、晴雲寺址（22）、赤岩寺北廃寺址（23）、北脇廃寺址（24）、滝ノ谷廃寺址、普門寺旧境内（25）がある。晴雲寺址では発掘調査が行われ、吉田藩主との関わりが深い近世の寺院遺構と判明した。北脇廃寺址は、K-90号窯式の灰釉陶器が採集されており、東三河地方でも古い段階に位置付けられる山寺である。堂跡の平場を始め、滝や巨岩などで構成され、近在の稲荷山古墳群を行場として使用していた。また普門寺旧境内は、2カ所の本堂跡と200カ所を越える平場群、巨岩、池、経塚などによって構成された、東海地方屈指の山寺跡である。山寺は多くが平安時代の9～10世紀に開創され、現在も普門寺や赤岩寺などが法灯を伝えている。

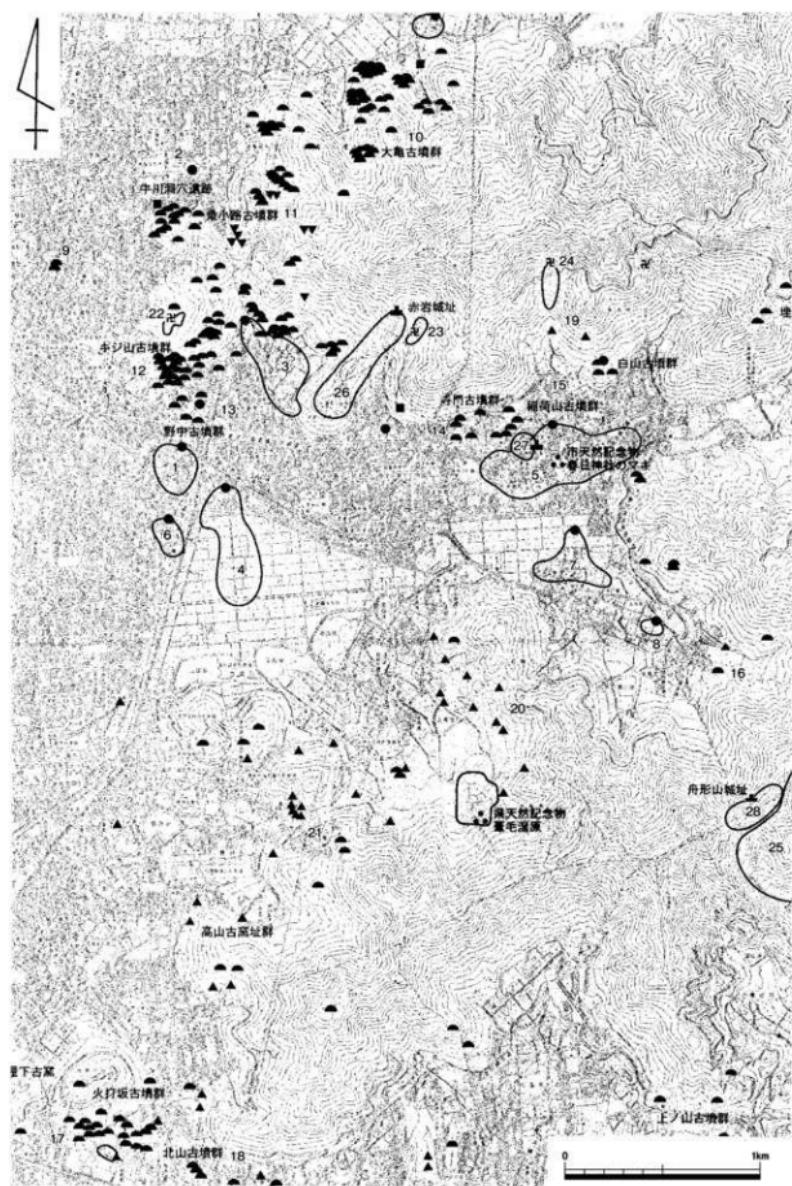
中世 中世の集落遺跡は、古代以降の集落遺跡とおおむね重複している。居村遺跡でも中世全般の遺物が出土するほか、東岩田遺跡、大坪遺跡、多米東町遺跡、森中遺跡などで当該期の遺物が採集されている。

城址 多米地区には古くから街道が通り、国境越えを控えた戦略上の要地であった。このため付近にはいくつかの中世城館跡が存在する。赤岩山城址（26）は街道を眼下に望む山城で、多米城址（27）は元益城とも称し、在地領主であった多米氏の居館であった。区画整理の実施前までは土壘などの遺構が残されていたが、現在はほぼ滅失している。船形山城址（28）は普門寺旧境内が所在する船形山の山頂にある城で、山の南側にある街道を眼下に望む。国境の監視を目的とした「境目の城」で、戦略上の要地としてたびたび戦いの臺目にさらされた。普門寺と強いつながりをもって存在した城である。

最後に、調査区に隣接する西福寺に触れておく。西福寺は天文9年（1540）の創立と考えられる寺である。西福寺に伝わる文化14年棟札にあるように、この地はかつて「渥美郡岩崎庄坂本郷下岩崎村」であって、中世には普門寺を支えた「坂本村」の一部であった。薬師堂（現存しない）は岩崎村字草毛の山麓にあったものをこの地に移したという。現在、周囲は市街化が進行するが、東に展開している山麓の世界と強いつながりを持った地域であったことを、寺の歴史は伝えてくれる。

参考文献

- 愛知県教育委員会 1997 「愛知県中世城館跡調査報告Ⅲ」
- 豊橋寺院誌編纂委員会 1959 「豊橋寺院誌」 豊橋仏教会
- 豊橋市教育委員会 2002 「豊橋市埋蔵文化財調査報告書第65集 稲荷山古墳群」
- 豊橋市教育委員会 2008 「豊橋市埋蔵文化財調査報告書第108集 稲荷山古墳群（II）」
- 多米郷土誌編纂委員会 1967 「多米郷土誌」



第2図 周辺の遺跡分布図 (1/25,000)

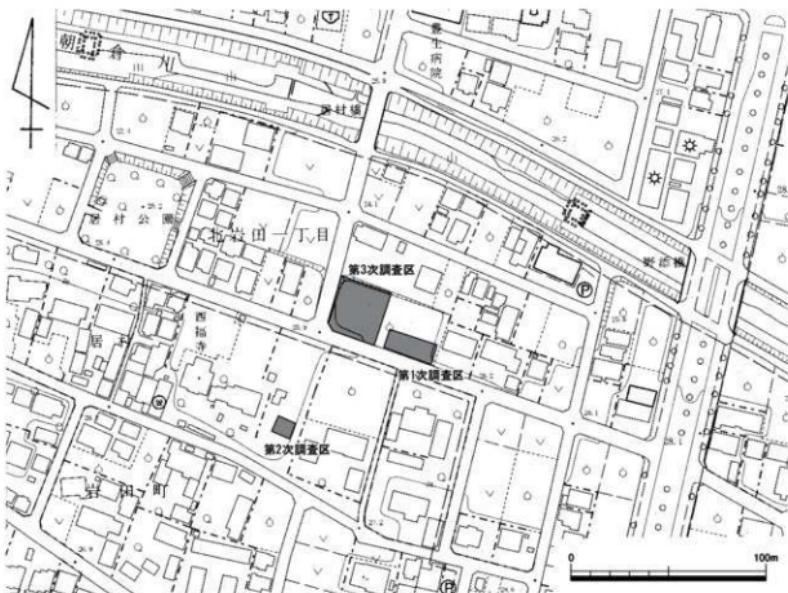
第2章 調査の目的と経過

1. 調査に至る経過 (第3図)

豊橋市北岩田一丁目8-28において住宅建設に伴う宅地造成工事が計画され、平成25年10月15日付で文化財保護法第93条第1項に基づく埋蔵文化財発掘の届出が提出された。この計画は、住宅地の一部と駐車場部分を深く掘削するというものであった。なお、隣地の第1次調査も同様の経緯で平成20年に発掘調査が行われている。

対象地は、南から北に向かって僅かに低く傾斜しており、これまで畠地として利用されていた。埋蔵文化財包蔵地（居村遺跡）に該当しており、遺構等は比較的良好に遺存しているものと推測されたが、万全を期すため事前に試掘確認調査を行い、遺跡の有無及び内容等の確認を行った。

試掘確認調査において、掘削工事の予定地内での遺構・遺物を確認した。豊橋市教育委員会では発掘調査が必要と判断し、同年11月1日より記録保存を目的とする緊急発掘調査を行った。調査を必要とする範囲は、遺構面まで掘削工事を行う南側の駐車場部分（S区 東西約24m×南北約7m）と北側の住宅+駐車場部分（N区 東西約15m×南北約11.5m）の2ヶ所が該当するため、便宜的にS区とN区に分けて調査を進めることとした。調査面積は計350m²である。



第3図 調査区位置図 (1/2,500)

2. 調査の経過と方法

今回の調査では、事前の試掘確認調査や第1次発掘調査の成果を参考に調査を進めることができた。表土層の堆積は比較的薄く、調査対象地から外れた中央部分を堆土置き場とした。調査はN区→S区の順で進め、表土剥ぎについてはいずれも重機を用いた。

調査区の設定は、時間的な制約からN区では一辺10m四方のグリッドを任意に設定し、N-1区、N-2区として調査を進めた。S区では測量委託による座標の設置が行われているため、これに沿ってS-1～4区を設定した。

いずれの地区も、遺構の掘り下げは人力で進めた。遺物の取り上げは遺構ごと・埋土ごとに行い、遺構に伴わない遺物はグリッドごとに取り上げた。また、図面作成や航空測量・写真撮影等を隨時行い、同年11月29日に現地での作業を終了した。

第3章 遺構と遺物

1. 遺構（第4～7図）

基本層序は、N区では暗茶灰色砂質土層や茶褐色砂質土層等の表土・耕作土が30cm程堆積し、その下は暗黃褐色粘質土層の地山となる。一方、S区の表土・耕作土は、茶褐色砂質土層が20cm程度堆積する非常に浅いものである。地山は明灰褐色砂礫土層で、N区に比べて礫が多く入るようになる。

検出された遺構には、竪穴建物（SB）、溝（SD）、土坑（SK）、焼土（SF）がある。N区では土坑が多く検出されているが、遺物を伴うものは少ない。一方S区では、竪穴建物・溝など多くの遺構が確認されているが、表土層の堆積が薄いこともあり遺構の多くは削平されている。

以下、遺物が出土している遺構を中心にN区から説明していく。

N-1区 SK-29

平面形はやや不整な円形と考えられるが、SK-32との切り合いははっきりしない。規模は径0.9m、底面は比較的平坦となり深さは7cm程を測る。埋土は、暗茶褐色砂質土である。出土した遺物には灰釉系陶器碗、土師器小片等（第8図1）があり、遺構は14世紀前半のものであろう。

N-1区 SK-32

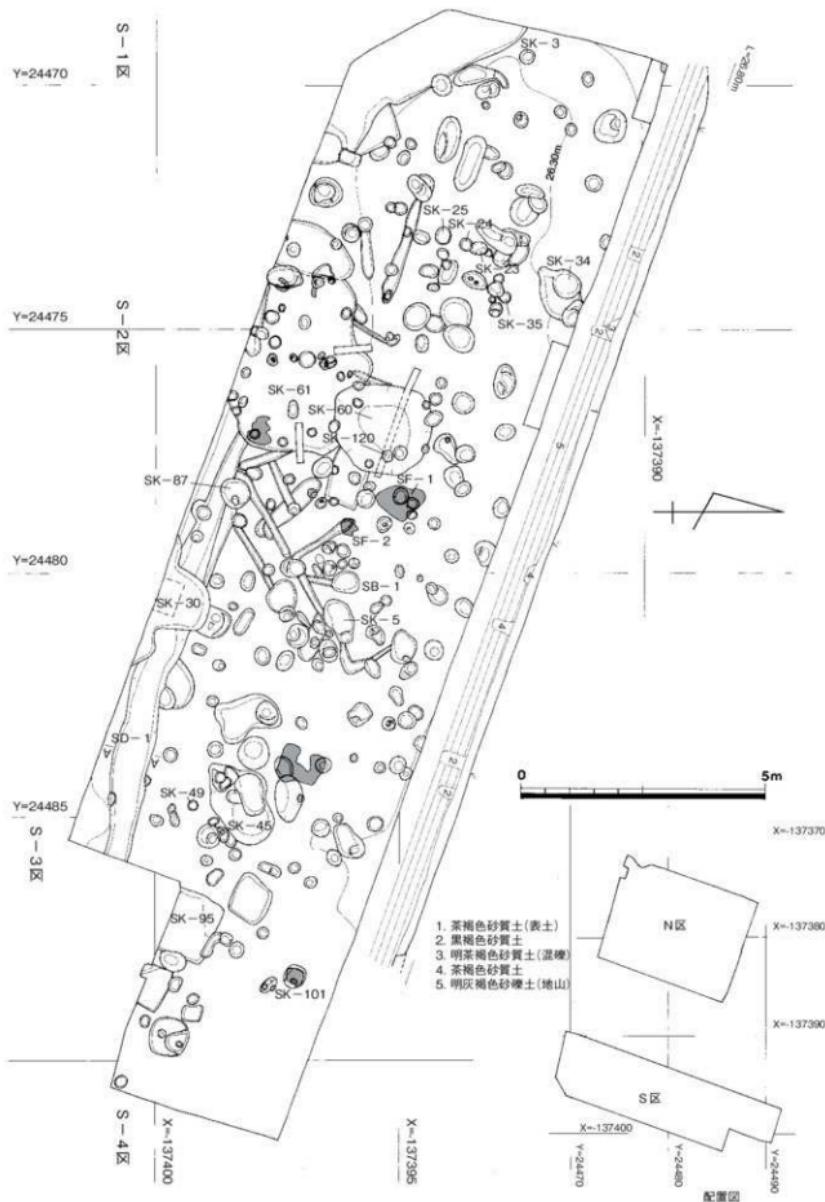
平面形は不整な「く」の字状と考えられるが、西側は調査区外となるため不明。規模は、長さ1.7m以上、幅径0.7～0.9m、底面は比較的平坦となり深さは10～12cm程を測る。埋土は、暗茶褐色砂質土である。SK-29やSK-33と埋土が酷似していたため、遺構の切り合いが明確に把握できていないが、出土した遺物の陶器小碗（第8図2）からすると、遺構は18世紀後半のものであろう。

N-1区 SK-33

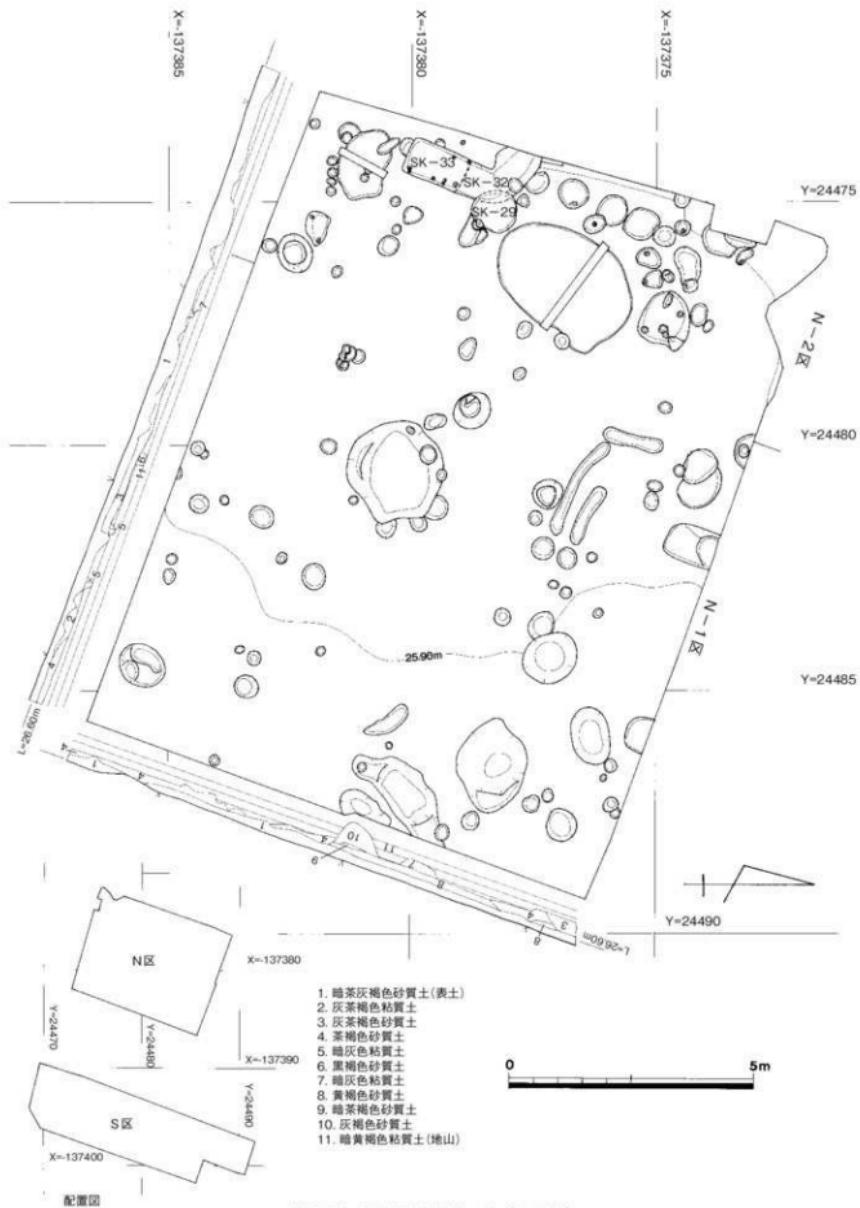
平面形は長方形と考えられるが、北辺の形状ははっきりしない。規模は南北1.25m以上×東西0.75m、底面は比較的平坦となり深さは23cm程を測る。埋土は、暗茶褐色砂質土である。土坑の南西隅付近からは、灰釉系陶器小皿2点（第8図3・4）が口縁部を合わせた状態で出土している。土壙墓の可能性が考えられ、遺構は13世紀代のものであろう。なお、内部には径10cm以下の杭穴状のものが4基検出されているが、この土坑に伴うかは不明である。

S区 SB-1（S-3区 SK-5・SF-1・SF-2）

S-2～3区で検出されたもので、壁溝状の溝の状況から方形あるいは長方形の竪穴建物と考えられる。主軸方位はN-25°-Wで、規模は南北2.7m×東西1.6m以上を測る。壁溝は、幅10～25cm、深さ3～4cm程度で、埋土は暗茶褐色砂質土である。この壁溝からは、土師器小片が僅かに出土しているが、器形や時期については不明。SB-1の壁溝に接して土坑SK-5や焼土SF-1・SF-2が確認でき、それぞれの位置関係からSB-1に伴う可能性が考えられる。SK-5は、平面形は楕円形で、長径1.0m×短径0.6m、深さ22cm程を測る。埋土は暗茶褐色砂質土である。出土した遺物には土師器甕（第8図21）があり、遺構は古墳時代前～中期のものであろう。SF-1はやや離れているが、SF-2はSB-1の火葬の可能性が高い。



第4図 調査区全体図-1 (1/100)



第5図 調査区全体図-2 (1/100)

なお、S-D-1の壁溝とした西側には別の壁溝状の溝が確認されており、建替えあるいは別の堅穴建物が予想される。

S区 S D - 1

調査区の南辺に沿うように確認されたもので、東西方向（N-73°-W）に直線的に延びるもので、西側はS-3区SK-61に切られている。規模は幅0.3~0.8mで、長さ9.1mを測る。溝の断面は浅い皿状で、深さは10cm程となる。西端と東端との高低差は6cm程で、西から東に向かって僅かに低くなる。埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物には、陶器鉢・甕、磁器碗、土師器小皿・甕、瓦等（第8図5~7）があり、遺構は18世紀後半のものであろう。

S-1区 SK - 3

平面形は円形で、規模は径0.3m、深さ30cm程を測る柱穴状の土坑である。埋土は、暗茶褐色砂質土である。出土した遺物には、土師器壺等（第8図8）があり、遺構の時期は古墳時代中期であろう。

S-2区 SK - 23

平面形はやや不整な円形で、規模は径0.3m、深さ23cm程を測る柱穴状の土坑である。埋土は、暗茶褐色砂質土である。出土した遺物には、土師器鍋等（第8図9）があり、遺構は13世紀代であろう。

S-2区 SK - 24

平面形は円形で、規模は径0.3m、深さ20cm程を測る柱穴状の土坑である。埋土は、暗茶褐色砂質土である。出土した遺物には、土師器鍋、焼土等（第8図10）があり、遺構は13世紀代であろう。

S-2区 SK - 25

平面形は梢円形で、規模は長径0.4m×短径0.3m、深さ20cm程を測る柱穴状の土坑である。埋土は、暗茶褐色砂質土である。出土した遺物には、灰釉系陶器碗、土師器小片等（第8図11・12）があり、遺構の時期は14世紀前半であろう。

S-2区 SK - 34

平面形はやや不整な梢円形で、規模は長径1.2m×短径0.8m、深さは浅い部分で18cm程、深い部分で41cmを測る。埋土は、暗茶褐色混礫砂質土である。出土した遺物には、土師器壺・甕等（第8図13~16）があり、遺構の時期は古墳時代中期であろう。

S-2区 SK - 39

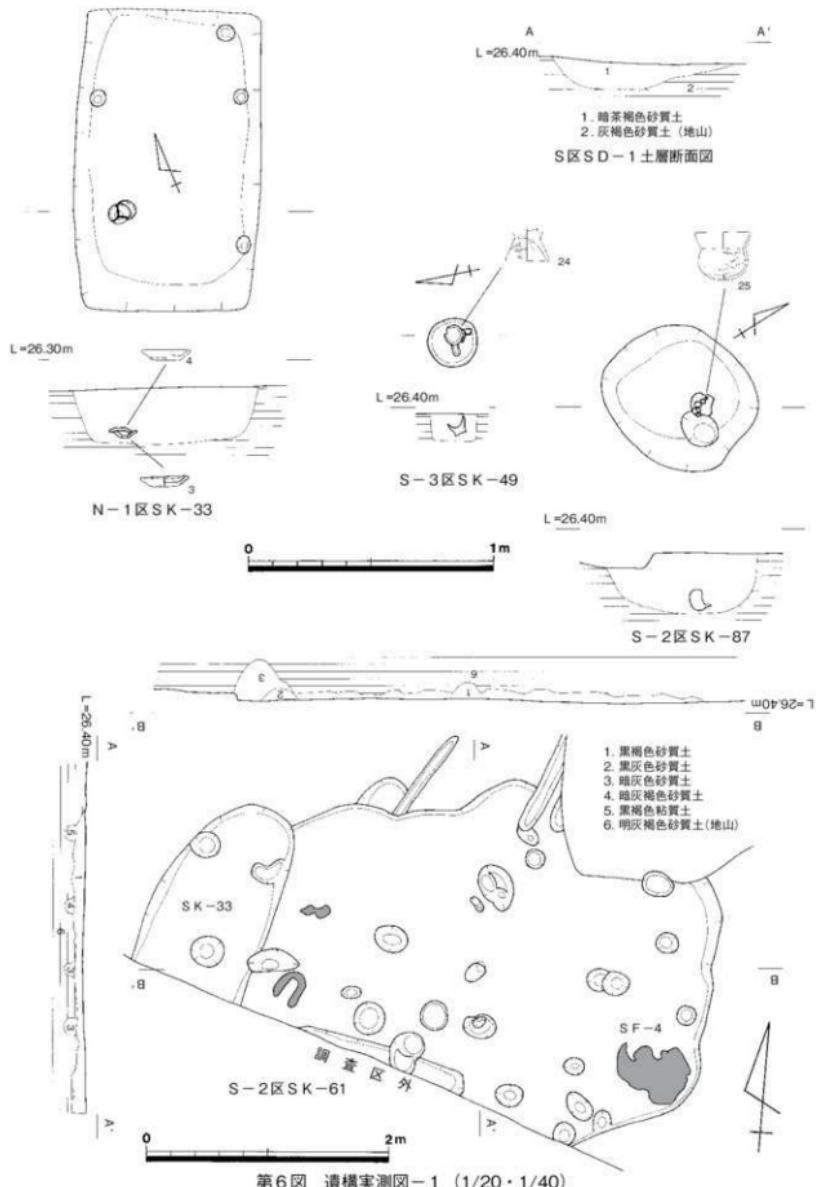
平面形は円形で、規模は径0.2m、深さ30cm程を測る柱穴状の土坑である。埋土は、暗茶褐色砂質土である。出土した遺物には、灰釉系陶器碗や混入と考えられる土師器甕等（第8図17）があり、遺構の時期は13~14世紀代であろう。

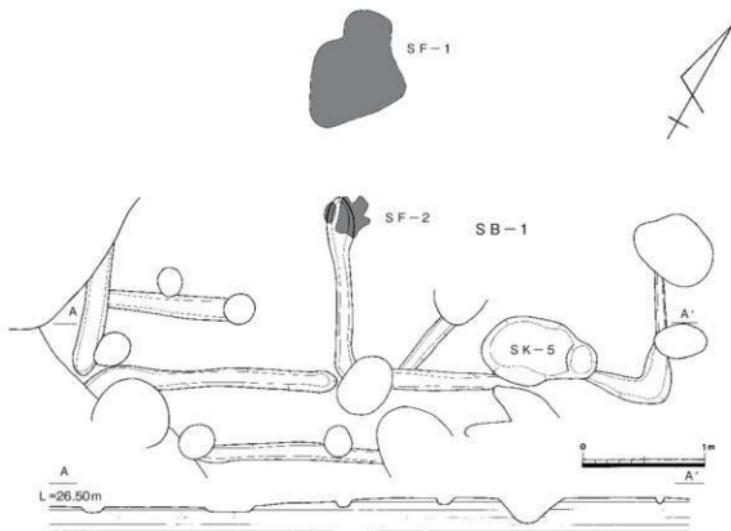
S-2区 SK - 60

平面形はやや不整な円形で、規模は径2.4m程、深さ65cm程を測り、底面は緩やかに傾斜している。埋土は、暗茶褐色砂質土に灰褐色粘土質土が混ざっている。出土した遺物には、土師器甕等（第8図18）があり、遺構の時期は古墳時代前~中期であろう。

S-2区 SK - 61

平面形は不整形なもので、西側はSK-33に切られ南側は調査区外となるためはっきりしない。規模は東西3.8m以上、南北2.9m以上、深さ10cm程を測り、底面は比較的平坦となる。また底面周囲で





第7図 遺構実測図-2 (1/40)

は焼土（SF-4他）が3ヶ所で確認されている。埋土は、黒褐色砂質土である。出土した遺物には、混入と考えられる灰釉系陶器碗（第8図19）の他に、古墳時代前期と推測される土師器の小片があり、周囲の状況等から遺構の時期は古墳時代前期であろう。なお当遺構は、竪穴建物の可能性も考えられるがこれに伴う柱穴等ははっきりしない。

S-2区SK-87

平面形はやや不整な円形で、規模は径0.6m、深さ27cm程を測り、底面は比較的平坦となる。SD-1に切られている。埋土は、黒褐色砂質土である。土坑の底面近くで比較的まとまった形の土師器壺（第8図25）が出土している。これ以外にも土師器高环片等があり、遺構は古墳時代中期であろう。

S-2区SK-120

SK-60の中で検出されたもので、平面形は円形で、規模は径0.2m、深さ55cm程を測る柱穴状の土坑である。埋土は、黒褐色砂質土である。出土した遺物には、土師器壺・甕等（第8図20）があり、遺構の時期は古墳時代中期であろう。

S-3区SK-30

調査区南端で検出されたもので、SD-1を切る。平面形は不整形で、規模は東西2.9m以上、南北1.1m以上、底面は比較的平坦で深さは15cm程を測る。埋土は、暗茶褐色砂質土に黄褐色砂質土が混ざる。出土した遺物には、陶器仏頭具、土師器鍋、瓦等（第8図22）があり、遺構は18世紀代であろう。

S-3区SK-45

平面形は楕円形と考えられるが、他の土坑に掘り込まれているため全体形ははっきりしない。規模は長径1.9m×短径1.2m、深さは浅く平坦な部分で28cmを測る。埋土は、暗茶褐色砂質土である。出

土した遺物には、土師器小皿等（第8図23）があり、遺構の時期は18世紀代であろう。

S-3区SK-49

平面形は円形で、規模は径0.2m、深さ12cm程を測る柱穴状の土坑である。埋土は、暗茶褐色砂質土である。土坑中央で土師器甕（第8図24）が出土しており、遺構は古墳時代前～中期であろう。

S-3区SK-95

平面形は方形あるいは長方形で、規模は一辺1.4m×1.0m以上、底面は比較的平坦で深さ32cm程を測る。埋土は、暗茶褐色砂質土である。出土した遺物には、陶器鉢・甕、土師器小皿等（第8図26）があり、遺構の時期は18世紀代であろう。

S-3区SK-101

平面形は円形で、規模は径0.4m、深さ20cm程を測り、底面は丸みを帯びたものとなる。埋土は、黒茶褐色砂質土であるが、上部には土器や焼石混じりの焼土ブロックが混じる。出土した遺物には、土師器甕・甕等（第8図27）が出土しており、遺構の時期は古墳時代前～中期であろう。

2. 遺物（第8図、第1表）

遺物は、土師器、灰釉系陶器、陶器等が、遺物用コンテナ（60×40×20cm）に1箱分出土している。

N-1区SK-29（1）

1は灰釉系陶器碗で、高台部は低く偏平となる。枠縫痕が高台接地面に残る。調整は底部外面糸切り後ナデ、これ以外は回転ナデ。14世紀前半のものであろう。

N-1区SK-32（2）

2は陶器小碗で、口縁部は内湾気味に立ち上がり端部は丸く収める。高台部削り出し。体部外面下半回転ヘラケズリ、これ以外は回転ナデ。高台部外面を除いて透明釉が掛かる。18世紀後半。

N-1区SK-33（3・4）

3・4は灰釉系陶器小皿で、いずれも底部は広く平坦で口縁部が緩やかに立ち上がる。調整は底部外面糸切り、これ以外は回転ナデ。いずれも13世紀代のものであろう。

S区SD-1（5～7）

5は陶器鉢で、口縁部は外上方に屈曲しながら伸び端部は丸く肥厚する。調整は体部外面下半回転ヘラケズリ、これ以外は回転ナデ。6は土師器小皿で、口縁部が僅かに立ち上がる。内面ナデ、外側ナデ、指オサエによる調整。これらは、18世紀後半のものであろう。7は土師器甕で、口縁部は緩やかに外反し端部は面となる。古墳時代前～中期のものと考えられ、混入品。

S-1区SK-3（8）

8は土師器有稜口縁甕で、口縁部は緩やかに外反し端部は丸く収める。調整は、摩滅が著しく不明。松河戸I～II式期のものであろう。

S-2区SK-23（9）

9は土師器鍋で、いわゆる伊勢型鍋。口縁部は大きく外反し、端部は丸く収める。調整は、口縁端部ヨコナデ、内面ハケメ。13世紀代のものであろう。

S-2区SK-24 (10)

10は土師器鍋で、いわゆる伊勢型鍋。口縁部は大きく外反し、端部は丸く収める。調整は、摩滅が著しく不明。13世紀代のものであろう。

S-2区SK-25 (11・12)

11・12は、いずれも灰釉系陶器碗で、底部は平坦で口縁部は外上方へ伸びる。高台部は低く偏平で、接地面には初殻痕。調整は底部外面糸切り後ナデ、これ以外は回転ナデ。14世紀前半のものであろう。

S-2区SK-34 (13~16)

13~16は、いずれも土師器。13は壺底部で、突出した平底となる。調整はナデ。14は甕口縁部で、緩やかに外反し端部は丸く収める。ヨコナデ調整。15は台付甕脚部で、「ハ」の字状に開き端部は丸く収める。ハケによる調整が残る。16は甕口縁部で、大きく外反し端部は丸く収める。ナデ調整か。これらは、松河戸I~II式期のものと考えられるが、いずれも小片で摩滅しているため詳細は不明。

S-2区SK-39 (17)

17は土師器甕で、口縁部は大きく外反し端部は丸く収める。ヨコナデ調整。古墳時代前~中期。

S-2区SK-60 (18)

18は土師器台付甕で、脚部は内湾気味に「ハ」の字状に開く。調整は、内外面ナデ・指オサエ。古墳時代前~中期のものであろう。

S-2区SK-61 (19)

19は灰釉系陶器碗で、口縁部は外上方へ伸び端部は丸く収める。調整は、内外面回転ナデ。13世紀代のものであろう。

S-2区SK-120 (20)

20は土師器複合口縁壺で、口縁部は緩やかに外反し途中で屈曲して更に立ち上がる。摩滅が著しく調整は不明。松河戸I式期のものであろう。

S-3区SK-5 (21)

21は土師器甕で、体部は緩やかに内傾し口縁部は大きく外反する。口縁端部は丸く収める。口縁部はヨコナデ調整であるが、これ以外は不明。古墳時代前~中期のものであろう。

S-3区SK-30 (22)

22は陶器仏龕具で、脚部は低く短く聞く。調整は回転ナデで、外面に僅かに灰釉が掛かる。18世紀代のものであろう。

S-3区SK-45 (23)

23は土師器小皿で、底部は平坦で口縁部は小さく立ち上がる。口縁内面に煤が付着。内面ナデ、外面ナデ・指オサエによる調整。18世紀代のものであろうか。

S-3区SK-49 (24)

24は土師器台付甕で、脚部は「ハ」の字状に開き端部は丸く収める。調整は、外面ハケメ、内面板ナデ。古墳時代前~中期のものであろう。

S-2区SK-87 (25)

25は土師器小型丸底壺で、体部は球形で頸部は緩やかに屈曲する。口縁部は内湾気味に伸び端部は

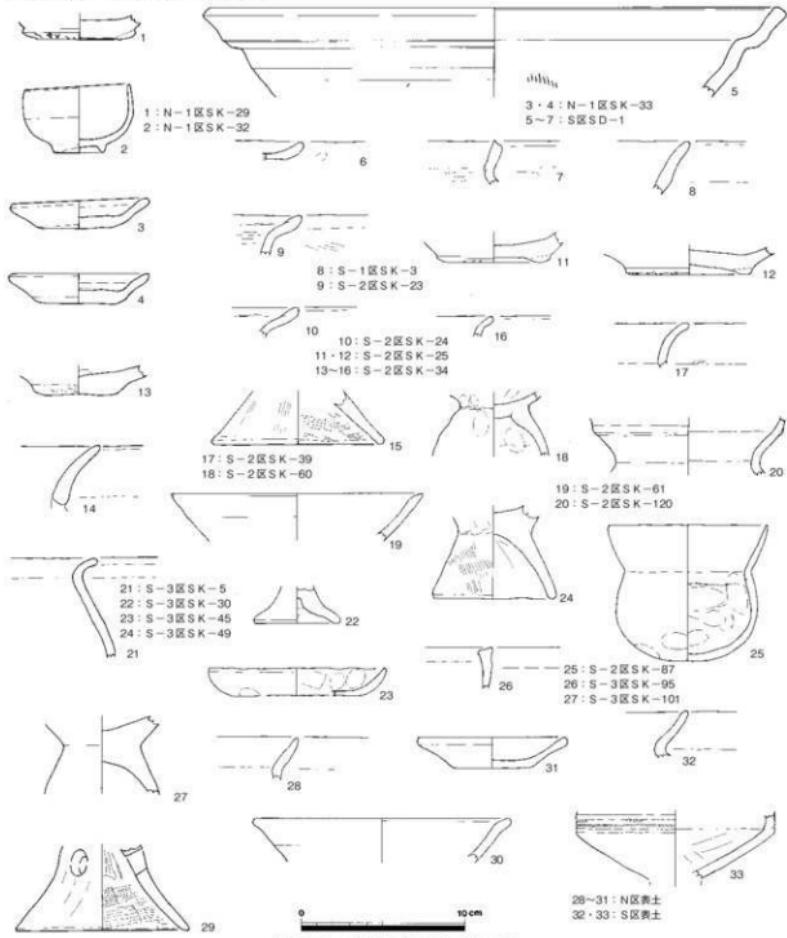
細く尖り気味に收める。体部内面はナデ・指オサエによる調整。松河戸I式期のものであろう。

S-3区SK-95 (26)

26は陶器香炉で、口縁部は垂直気味に伸び端部は内傾した平坦面となる。回転ナデによる調整。内面を除いて鉄軸が掛かる。18世紀代のものであろう。

S-3区SK-101 (27)

27は土師器台付甕で、脚部は内湾気味に開く。調整はナデと考えられるが、摩滅が著しいため不明。古墳時代前～中期のものであろう。



第8図 出土遺物実測図 (1/3)

N区表土 (28~31)

28は土師器鉢で、口縁部はやや受け口状で短く立ち上がる。29は土師器高环で、脚部は「ハ」の字状に大きく開く。透かし孔は3方。28・29は遡間Ⅱ～Ⅲ式期。30・31は灰釉系陶器。30は碗で、口縁端部は緩やかに外反する。内外面回転ナデ。31は小皿で、底部は平坦で口縁部が外方に伸びる。調整は底部外面糸切り、これ以外は回転ナデ。30・31は13世紀代。

S区表土 (32・33)

32は土師器鉢で、口縁部はやや受け口状となり短く立ち上がる。遡間Ⅱ～Ⅲ式期。33は弥生土器脚付壺で、体部は直線的に外方に伸び屈曲して垂直に立ち上がる。体部の立ち上がった部分には、櫛描横線文+刺突文が施され、赤色顔料が残る。弥生時代後期。

第1表 出土遺物観察表

目録-番号	地区	通稱	器種	分類	口径	高さ	底径	その他	胎土	焼成	色調	調査等	備考
8 -1	N-1	SK-29	P	碗		(1.5)	5.1		青	良好	淡灰褐色	内外面回転ナデ	高台部に初期痕
2	N-1	SK-22	T	小碗	6.5	4.2	3.0		青	良好	淡灰褐色	高台部削り落し	内外面に透明釉
3	N-1	SK-33	P	小皿	8.5	1.9	4.9		青	良好	暗灰褐色	内外面回転ナデ	
4	N-1	SK-33	P	小皿	8.6	1.9	5.1		青	良好	暗灰褐色	内外面回転ナデ	
5	S-3	SD-1	T	埴輪	35.8	(5.5)			青	良好	淡褐色	口縁部回転ナデ	内外面に鉄錆
6	S-2	SD-1	H	小皿	(1.1)				青	良好	淡褐色	外側ナデ・刷毛サエ	
7	S-2	SD-1	H	甕	(2.7)				青	良好	淡茶褐色	口縁部ヨコナデ・外縁板ナデ	泥入品
8	S-1	SK-3	H	甕	(3.3)				青	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ?	磨滅著しい
9	S-2	SK-23	H	鍋	(2.4)				青	良好	淡茶褐色	口縁部板ナデ・ハケメ	伊勢型鍋
10	S-2	SK-24	H	鍋	(1.9)				青	良好	淡茶褐色	口縁部ヨコナデ	伊勢型鍋
11	S-2	SK-25	P	碗	(1.8)	7.0			青	良好	淡灰褐色	底部外側丸切り後ナデ	高台部に初期痕
12	S-2	SK-25	P	碗	(1.6)	7.7			青	良好	淡灰褐色	底部外側丸切り後ナデ	高台部に初期痕
13	S-2	SK-34	H	甕	(1.8)	5.1			青	良好	淡褐色	内外面ナデ・刷毛サエ	
14	S-2	SK-34	H	甕	(3.6)				青	良好	淡茶褐色	口縁部ヨコナデ?	磨滅著しい
15	S-2	SK-34	H	甕	(3.3)	10.2			青	良好	淡褐色	内外面にハケメ	台付甕御器
16	S-2	SK-34	H	甕	(1.2)				青	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ?	磨滅著しい
17	S-2	SK-39	H	甕	(2.7)				青	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ	
18	S-2	SK-60	H	甕	(3.9)				青	良好	淡褐色	内外面ナデ・刷毛サエ	S-2区SK-120と接合
19	S-2	SK-61	P	碗	15.4	(2.9)			青	良好	灰褐色	口縁部回転ナデ	
20	S-2	SK-120	H	甕	(3.5)				青	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ?	磨滅著しい
21	S-3	SK-5	H	甕	(6.1)				青	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ?	磨滅著しい
22	S-3	SK-30	T	埴輪	(2.2)	5.3			青	良好	淡灰褐色	内外面回転ナデ	外面に僅かに灰斑
23	S-3	SK-45	H	小皿	10.9	1.7			青	良好	淡褐色	内面ナデ・刷毛サエ	内面に刷毛着
24	S-3	SK-49	H	甕	(5.8)	7.3			青	良好	淡褐色	側外面ハケメ	台付甕御器
25	S-2	SK-87	H	甕	9.8	8.4			青	良好	淡褐色	体部内面ナデ・刷毛サエ	磨滅著しい
26	S-3	SK-95	T	香炉	(2.6)				青	良好	淡褐色	口縁部回転ナデ	内外面に鉄錆
27	S-3	SK-101	H	甕	(4.6)				青	良好	明茶褐色	内面ナデ?	磨滅著しい
28	N	表土	H	鉢	(2.7)				青	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ?	磨滅著しい
29	N	表土	H	高环	(5.3)	10.6			青	良好	暗灰褐色	側外面ハケメ	透かし孔3方向か
30	N	表土	P	碗	15.6	(2.7)			青	良好	淡褐色	口縁部回転ナデ	
31	N	表土	P	小皿	9.0	1.9	4.6		青	良好	淡灰褐色	底部外側糸切り	
32	S	表土	H	鉢	(2.9)				青	良好	淡茶褐色	口縁部ヨコナデ?	磨滅著しい
33	S	表土	Y	脚付壺	(4.2)				青	良好	淡褐色	内面ナデ・刷ナデ	S-3区SK-120と接合

◆器種記号 H-土器上器 P-土師器 T-灰釉系陶器 Y-陶器
法量の単位はcm。()は残存数値。底辺には、刷毛着や高台性を含む。

第4章 総括

居村遺跡第3次調査では、表土層の堆積が薄いこともあり、遺構の遺存状況はあまり良くない。しかししながら、古墳時代前期～中期を中心とした時期（仮に「第Ⅰ期」とする。以下同じ）の遺構・遺物が確認されている。また、13～14世紀（「第Ⅱ期」）の遺構・遺物も確認されており、隣接する第1次調査結果と大きく変わるものではなかった。また18世紀頃（「第Ⅲ期」）の遺構・遺物も、全体的には僅かであるが散見される。

居村遺跡について、第1・2次調査の結果も踏まえながらまとめてみたい。遺跡は、朝倉川左岸の標高25m前後の比較的平坦な段丘上に立地している。遺跡の規模ははっきりとしていないが、径200m程の広がりを持つと推測される。

遺跡の動向については、弥生時代後期には集落が成立し、第Ⅰ期を中心に小規模ながら比較的長期にわたって継続したと考えられる。豊橋市東部の多米・岩崎地域においては、同時期の遺跡の状況がはっきりしないが、単点的集落とは考え難い規模の集落と推測される。その後、古墳時代後期から中世初頭にかけては、遺構・遺物がほとんど確認されてないことから、集落の断絶があったと考えられる。この時期は、周囲の山麓において群集墳や灰釉陶器窯などが築かれる時期と重なるが、この「集落の空白」が意味するものは不明である。

第Ⅱ期において再び集落が広がるが、各調査区の遺構の密度などからすると散村的な状況であったようである。中世普門寺を支えた「坂本村」の一部とも考えられるが詳細は明らかに出来ていない。

続く15～17世紀の「集落の空白」を経て、第Ⅲ期とした18世紀には再度小規模な集落が形成されるようであり、その状況が現在まで続いていると考えられる。

参考文献

豊橋市教育委員会 2014 「豊橋市埋蔵文化財調査報告書第129集 市内遺跡発掘調査—平成23年度—」

居村遺跡 第3次発掘調査
写 真 図 版



1. 調査区遠景（南東から）



2. N区全景（垂直）



1. S区全景（垂直）



2. S区西侧全景（垂直）

居村遺跡第3次

写真図版3



1. N-1区SK-33全景（南から）



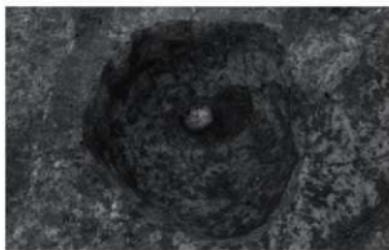
2. S-2区SK-61全景（東から）



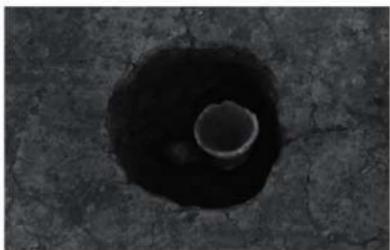
3. S-2区SK-61SF-4全景（西から）



4. S-2区SK-87遺物出土状況（北西から）



5. S-2区SK-87全景（南から）



6. S-3区SK-49遺物出土状況（南から）

写真図版4

居村遺跡第3次



1. S-3区SK-101断ち割り状況（南から）



2. S区作業風景（南東から）



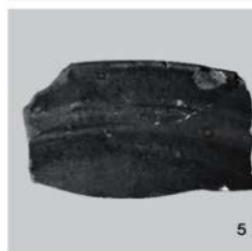
2



3



4



5



18



24



25



29



33

3. 出土遺物

報告書抄録

ふりがな 書名	しないいせきはくつちょうさーへいせい25ねんどー							
副書名	市内遺跡発掘調査－平成25年度－							
シリーズ名	豊橋市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第138集							
編著者名	久保友香理、小林久彦							
編集機関	豊橋市教育委員会							
所在地	〒440-0897 愛知県豊橋市松葉町三丁目1番地 TEL 0532-56-6060							
発行年	西暦2016年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 度分秒	東經 度分秒	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
吉田城址 (43次)	八町通三丁目 124、125	23201	790393	34度 46分 1秒	137度 23分 35秒	2013.09.09 ~ 2013.10.04	230	記録保存 調査
二連木城址 (5次)	仁連木町210 -1、210-2	23201	790401	34度 46分 7秒	137度 24分 58秒	2013.09.17 ~ 2013.09.25	106.5	記録保存 調査
二連木城址 (6次)	仁連木町128	23201	790401	34度 46分 6秒	137度 24分 57秒	2013.10.07 ~ 2013.11.01	350	記録保存 調査
居村遺跡 (3次)	北岩田一丁目 8-28	23201	790967	34度 45分 38秒	137度 26分 3秒	2013.11.01 ~ 2013.11.29	350	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
吉田城址 (43次)	城館	近世	土塁・堀・土坑	陶器・磁器・土師器・瓦			外堀とこれに伴う 土塁の確認。	
二連木城址 (5・6次)	城館	中世～ 近世	溝・井戸・土坑	灰釉陶器・灰釉系陶器・土 師器			曲輪を区画する堀 の一部を確認。	
居村遺跡 (3次)	集落	古墳・ 中世	竪穴建物・溝・土坑	土師器・灰釉系陶器・陶器				
要約	<ul style="list-style-type: none"> 吉田城址第43次発掘調査では、藩士屋敷地と外堀に当たる調査区で、外堀とこれに伴う土塁の位置を確認できた。 二連木城址第6次発掘調査区は、中心部分（主郭）から少し南東側へ離れた位置にあり、絵図や地籍図で想定された南東端の曲輪に当たる可能性が高い。曲輪を区切る堀と推測される遺構や井戸などが検出されている。 居村遺跡第3次発掘調査では、第1・2次調査と同様に古墳時代前～中期と中世の遺構が主体となっていることを確認した。 							

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第138集

市内遺跡発掘調査

－平成25年度－

2016年3月25日

発行 豊橋市教育委員会◎
美術博物館 文化財センター
〒440-0897 豊橋市松葉町三丁目1番地

印刷 株式会社豊橋印刷社